

俺のVTuber活動日誌

ホツシー@VTuber

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「そうだ、V T u b e r になろう」

この小説はある日、V T u b e r になることを決意した作者が実際に体験した経験を
基に書いたV T u b e r活動日誌である。

この小説がどのような物語になるのか。

それはきっと、これを読んでいるあなた次第、かも？

※この小説は『小説家になろう』、『pixiv』、『カクヨム』にも投稿しています。

もしよろしければチャンネル登録よろしくお願ひします。

904
Twitter : https://twitter.com/hosiflano
チャンネル : https://www.youtube.com/channel/
UC-HP7uBRBgNDokI-3zT62w

目 次

一ページ目：V T u b e r になることを 決意した日	1	二ページ目：小説を書くことを決意した 日	1
三ページ目：美少女になつた日	8	四ページ目：運命の日	25
五ページ目：チャンネルができた日	15	六ページ目：V T u b e r 活動を始めた 日	37
七ページ目：調べ物をした日	44	八ページ目：挨拶を決めた日	52
九ページ目：タグを決めた日	70	十ページ目：サークルについて話した日	80
十一ページ目：生主を休止した日	85	十二ページ目：デビューした日	101
十三ページ目：初マ○クラ配信した日	110	十四ページ目：初マ○クラ配信した日	110
十五ページ目：ヨツトをやつた日	121	十六ページ目：執筆配信をした日	134
後編		前編	
八ページ目：挨拶を決めた日	58	七ページ目：調べ物をした日	44

一ページ目：V T u b e r になることを決意した日

「そうだ、V T u b e r になろう」

そう思ったのは唐突、でもなかつた。

元々、9年以上ニコニコ動画で生放送をしていたし、地声によるゲーム実況や文章を読ませるソフトを利用した朗読動画。最近ではT R P Gのリプレイ動画を投稿している身だ。活動している場所は違うが、同じ動画配信サイトであるY o u T u b e もよく利用している。

その中でもV T u b e r——バーチャルユーチューバーに興味が出るのも不思議ではない。

最初は本当にただの興味だった。

おススメ動画の一覧にV T u b e r の動画が現れ、なんだろうと首を傾げながら再生。そして、その存在を知り、時々、切り抜きを見て楽しむ。ただ、それだけだつた。

正直、V T u b e r になろうと思つたきっかけは自分でもよくわかつていない。本当に、『あ、なろう』と思つた。

突拍子もないアイディア。

脈絡のない挑戦。

自分で理解できない解答。

でも、だからこそ、自分の本心が零れ落ちたのだと何となく察した。決まってからは早かつた。とりあえず、モデルを作れそうな友人に心当たりがあつたのでメッセージを飛ばし、立ち絵の作成を依頼。心優しい友人だつたため、俺の思いつきにも笑つて賛同し、立ち絵に関して話し合つた。

一方、その間にも『V T u b e r になろう』とTwitterで呟いたのだが、十数名の人人が『いいね』をしてくれたことに少々驚く。十数人程度の『いいね』で驚くのか、と思われるかもしれないが生放送をしている身でありながらTwitterをほとんど利用していない自分からしてみれば十分驚くことだつた。

きっと、V T u b e r になるだけでも様々な問題が浮上するだろう。立ち絵を描いてくれる友人がいるだけでも俺は幸運だつたに違いない。

V T u b e r になる、と宣伝したからか、無性に生放送がしたくなつて突然的にニコ生を始めた。T R P G の動画編集も進めたかつた上、いつも遊びに来てくれる常連さんたちがどんな反応をするのか気になつたのである。

「前から切り抜きとか見てて……それに前々からわいわいぎやあぎやあやつてる時に顔も出せたらいいのになつて思つてたんだよ。だから、V T u b e r になればもつとわい

わいできるかなつて——だから、V T u b e r になるかつて

生放送を始めてすぐにV T u b e r になろうと思つたきつかけを話す。そう話しながらもV T u b e r という世界は厳しいことは9年も生放送を続けていたからこそ容易に想像できた。数人程度だが、ほぼ毎回遊びに来てくれるリスナーさんだつて長い間、生放送を続けていたからこそ仲良くなつた人たちだ。本当に一から始めるのだから常連なんかいるわけがない。本当にV T u b e r になつても今までと同じようにわいわいぎやあぎやあ騒げるか不安だつた。

——ぶいちゅーばーほつしさん(・・ω・・)
——なに？メス堕ちするの？

「メス墮ちしねえよ！」

そんな不安を蹴飛ばすようにいつものようにリスナーさんがからかうようなコメントを打ち込んでくれた。もちろん、俺もいつものように笑いながらそれにツッコミを入れる。

「でも、俺がV T u b e r になつたら応援してくれんの？」

——まあ頑張つて

——V T u b e rになつたら見に来ないわ

そんな作業をしながらも一番気にしていたことを聞くとそんなコメントが流れた。まあ、活動サイトが変わるわけだし、わざわざ俺を追いかけて来る物好きはいないか、と内心ちょっと落ち込む。

——Y o u T u b eにスパチャだけして帰るわ

「いや、なんでだよ！　そもそもスパチャ投げるために収益化しなきやならないんだけど！　しかも、それ、ただのスponサーだからな！」

数秒後に流れた華麗な掌返しコメントに思わず声を荒げてしまう。俺の常連さんはこういう奴らだったわ、と呆れながらも笑つてしまつた。

V T u b e rとしてやつていけるのか、そもそも本当にV T u b e rになれるのか。まだ不安はたくさんあるけど、少しだけ気持ちが前向きになつたような気がした。それからはいつも通りにわいわいぎやあぎやあ言いながら生放送を続け——。

——ちっす

——v化するんだって???

——最後の方に現在、俺の生放送に来てくれる常連さんの中で最も付き合いの長いりスナーさんが来た。

「うん、そのつもり」

その時、謀S T Gの妹様と遊んでいたため、簡潔に答えた。前日にY o u T u b eで活躍しているV T u b e rが妹様と遊んでいるのを見て俺も遊びたくなったのである。しかし、次に流れたコメントで俺の意識は半分ほど引っ張られる。

——いつかデビューはしたいと思つてるけどまだ無理やなあ

「え？ V T u b e rになりたいの？」

——スパチャ投げる時は投げるわ

「だから、なんでみんな、スパチャ投げようとすんだよ！」

V T u b e r になろうと思ったのは唐突で、個人で頑張るつもりだった。一応、9年もニコ生を続けていたし、様々な活動をしているから誹謗中傷にも慣れている。どんなに数字が伸びなくても今まで通り、持ち前の継続力で活動を続けよう。そう思つていた。

(……でも、もしかしたら)

まだ活動の内容も、キャラクターの設定も、チャンネルすら作つていないお先真つ暗な計画。

しかし、それでも、今までの俺と違うのは——相方ができるかもしないこと。
本当に相方になつてくれるかわからないが、一緒にできたら楽しそうだ。

この時の俺は妹様にボコボコにされながらもそう考えていた。
これが9年以上、様々な活動をしながらも特に日の目に出なかつた俺が何の脈絡もなく、V T u b e r になろうと決意した一日目のお話。

誰もが予想した失敗談になるのか。奇跡のようなサクセスストーリーになるのか。
こうやつて、小説として活動記録を残そうとしている俺ですらわからない。
だつて、この物語は現実なのだから。

でも、確かに言えるのは——この小説は確実に俺にとつて黒歴史になる。

では、次回はどうしてこんな小説を投稿することになったのか。
その経緯を話そうと思う。

それでは、皆様、また、次のお話でお会いしましょう。

二ページ目：小説を書くことを決意した日

突然の話だが、アイデンティティーとは何か？

それは己が己であることを証明する何か。言い方を変えると自身の持ち味だと思つてゐる。

では、俺のアイデンティティーは何なのか。V T u b e r になるにあたつてふと頭に浮かんだ。

かれこれ 9 年以上創作活動を続けていた身だが、その中でも色々な活動を行つてきた。

9 年にも及ぶニコニコ生放送。

地声ゲーム実況や文章を読ませるソフトを利用した朗読動画、T R P G リプレイ動画などの動画制作。

一時期だが、数人の人が集まつて声劇をしたこと也有つた。

でも、やはり、俺が最も長く、活動を続けてきたのは小説だ。

特に東方 p r o j e c t 二次創作の『東方楽曲伝』はニコニコ生放送と同様に 9 年間、投稿し続け、今もなお続いている。

いや、本当に終わらないのです。終わろう、終わらせよう、終わつてくれよとは思つているのですが、何故か終わらなくて困っています。多分、2021年には完結すると思うけど。

閑話休題。

では、V T u b e r になるにあたつて俺が俺であることを証明できる何か。そして、俺の持ち味である——小説をどうにか活かせないか、と考えた。なお、これはV T u b e r になると決意した翌日のできごとである。

だが、はつきり言つて小説はライブ配信には全くと言つていいほど向いていないのだ。ニコ生をしながら小説を書くという生放送をしているが、確に書けたものではない。ソースは何年も小説枠を取り続け、未だに数百文字しか書けない俺。もちろん、無言になればいくらでも書けるがそれはライブ配信と言つていいのだろうか？　いや、違うだろう。

なら、何か台本を書いて朗読する？　うん、それはただの朗読会だ。小説をして

いるとは言えない。

そもそもライブ配信は基本的に雑談やゲームなど、何かをしながらでもコメントに反応できるような内容が主流。

それに対し、小説は構成、情景、言葉選び、前後の文章のバランスなど頭で考えることが多く、とてもではないが、雑談やコメントに反応しながら書くのは俺には無理だ。執筆系V T u b e rになるのは無謀だつたか。いや、それでもどうにか小説を活かしたい。

「あ……」

そして、思いついた。あまりにも唐突すぎて、自分でも拍子抜けしてしまうほどあつさりと。思いついたタイミングも『自分の車を駐車場に停めている最中』という他のことを考える暇がないような状態だつた。

「そうだ、V T u b e r活動を小説に書こう」

車から降りながら思いついたアイデイアを口にする。

V T u b e rになろうと思つた日からV T u b e rデビューする日までの準備期間。更にデビューしてからの経験を全て記録に残す。それがV T u b e r活動で小説を活かす唯一の方法だと思つた。

もちろん、小説を活かすだけではない。ただできえ、人を集めにくい個人勢なのだ。

Twitterやライブ配信で宣伝してもチャンネル登録数は伸びないだろう。

だが、V Tuber活動を記した小説を自分が利用している小説投稿サイトに投稿すれば宣伝にもなる。打算的な考えだが、それでもしなければ成り上がりがれない世界。まさに一石二鳥な考え方。

しかし、V Tuber活動を小説化するには問題が一つ。

それは許可である。

V Tuber活動を小説化するにあたって避けられないのはニコ生での描写だ。立ち絵を頼んだ友人もニコ生のリスナーさんだし、相方になるかもしれない最古参常連さんももちろん、リスナー。他にもV Tuber活動に関して準備する様子もニコ生をしながらやるつもりだ。ならば、小説化すると必ずニコ生の描写を書くことになる。つまり、常連さんたちに小説にコメントを書いてもいいか許可を取る必要があるのだ。（でも、常連と言つても来ない時もあるからなあ）

晩御飯を食べながらスマホをポチポチと弄り、SNSで常連さんたちのグループへメッセージを送る。

——突然ですが今日の生放送で大切な話があるから可能ならきてほしいです

それから生放送を始めて常連さんが来るのを待つて居る間、雑談をしながらV T u b e rに閑して調べる。そして、数分ぐらいで常連さんたちが集まり始めた。

——引退ですか？

——引退するの？

「いや、V T u b e rになるのになんて引退するのさ」

ジャブの如く放り込まれるコメントを軽くあしらいながらV T u b e r活動を小説化することを説明する。

「生放送して話したこととか、自分の心情とか。ほぼノンフィクションの実体験を小説としていくつかの小説投稿サイトに投稿して、この小説の主人公である俺が読者さんたちに支えられながらどんな物語を紡ぐか見守るつて企画——つまり、すでにあなたたちは小説の登場人物です！ わかりますか？ 実はもうあなたたちは小説に登場してます！」

——なるほどー

——主要人物になれる！

「そう、君たちは初期勢です！俺のことをニコ生時代から知ってる人たちですね。それで、小説に書いてもいいか、聞きたかったんですよ」

——問題ないべ

——友の同人誌のネタにされる予定だからへーきへーき

「お、ありがとー。他の人もいい？」

——今まで完全に止まつて聞こえてなかつた

「え、マジ？ なら、もう一回説明するけど——」

どうやら、この日、ニコ生の調子が悪く、数人ほど放送が見られなくなつていたらしく、改めてV T u b e r活動の小説化を説明する。

「——で、書いてもいい？」

——殆ど聞こえてないけど、Vの活動するにあたつて今までのものをうんたらかんた

らとは聞こえた

「それ、聞こえてないやつですね。なら、もう一回説明するよ？」

二コ生、本当に調子悪いなと思いつながら3度目の説明をする。もうこの時点で何度も説明しているからか、説明もかなりおざなりになつていた。

「それで許可が欲しかったんだけど——」

——やつと戻つてこれた

「もおおおおおおおお！」

この後、4度目の説明をして何とか許可を貰つた。

これが『俺のV T u b e r 活動日誌』を書くことになつたきっかけ。

そして、V T u b e r 活動二日目の出来事。

しかし、実は二日目の出来事はまだ終わらない。

では、どんな出来事があつたのか、それは次回のお話で。

それでは、皆様、また、次のお話を聴きたいと思います。

三ページ目：美少女になつた日

今回のお話をする前に、基本的な問い合わせよう。

V T u b e r——バーチャルユーチューバーとは何か？

その答えを導くため、誰もが一度は教えを乞うたことはあるだろう、グーグル大先生に質問を投げかけてみると一言でまとめると『2Dまたは3Dのアバターを使って活動しているY o u T u b e r』らしい。ここで自分の予想と違う答えが返ってきたらどうしようかと思ったが、だいたい合っているようで一安心である

そう、つまり、V T u b e rになるためには2Dまたは3Dのアバターを用意しなければならない。俺の場合、V T u b e rになると決意したその日に友人にアバター制作の依頼を出しているのでアバター問題はすでに解決している。

だが、アバターが完成してもそれを動かすソフトがなければ宝の持ち腐れ。もちろん、アバターを動かす方法は初日の内に調べてあつた。

「じゃあ、小説のことも話したので次に『F a c e R i g』を導入しまーす」

小説に関して常連さんに許可をもらつたのでグーグル大先生に『F a c e R i g』と打ち込みながら言う。

『FaceRig』はウェブカメラで顔を映し、その顔の動きに合わせてアバターを動かすことができるソフトである。

しかし、どうやら『FaceRig』は外国のソフトらしく、よく見るVtuberのような美少女系のアバターはもちろん、そもそもLive2Dにすら対応していない。そのため、Live2Dのイラストを動かすために『FaceRig Live2D Module』を同時に購入しなければならないのだ。

また、自分の場合、『FaceRig』を購入するために『steam』のアカウントを作ることから始めたため、購入するだけで少しばかり時間がかかるとなってしまった。

——Vになるつて事は恋声とかつかつてボイチェンするんですか？

その間も生放送は続いている。どうやら、ボイチェンを使うか気になつたようでそんな質問が飛んできた。

「ううん 地声。そもそも美少女にならないから」

そう、俺は『バ 美肉』——『バーチャル美少女受肉』はしない。もちろん、可愛い女の子のアバターを使うことも考えはしたが、それ以上に俺にふさわしいアバター候補があつたため、美少女になることは断念したのである。

——美少女にならないってことは 筋肉になるんですか？

「え？ 美少女にならな いってことは筋肉になるってことなの？」

『バ 美肉』事情にあまり詳しく述べたのでそのコメントを見て思わず声が裏返つてしまつた。おそらく冗談だと思うが、もしこれが事実ならバーチャル世界は俺の想像以上に混沌としているのかも知れない。もしかして俺はやばい世界に飛び込もうとしている？

——最初バ 美肉するのかと思つてたw

「しないよー……あ、ただ——」

『FaceRig』の導入を勧めながらニヤリと笑う。ソフトの導入をする、ということはその動作確認もしなければならない。幸い、ウェブカメラは角度的にもPCの内蔵カメラで大丈夫そう。あとは、購入するだけだ。

「——ちよつと、美少女になるわ」

そして、この日、仮初とはいえ、俺は美少女になった。

「おお……美少女になつてゐる」
『FaceRi g』の導入も終わり、早速美少女になつてみたが、予想以上にサンプルアバターは自分の表情に合わせて動いてくれた。顔を横に軽く背ければアバターも同

じように動くし、瞬きをすればアバターも目を閉じる。特に設定も弄っていないのにここまで動いてくれるとは思わず、感動してしまった。

しかし、興奮する俺に対し、コメントはいつものように生主である俺を置いてリスナーさん同士で別の話を続けていた。俺の放送はよく生主が話についていけず、置いてけぼりになることで有名なのだ。

「すげえ、ちゃんと目の動きも認識するんだな」

——facerig実況（声のみ）

コメントで今の状況を説明してくれたが、事故が起きた時のために『Facerig』の画面を一切、出していなかつたのである。かれこれ9年ほど生放送を続けてきたが、事故で顔が映つたのは2回ほどしかなかつた。こんなところで顔バレしてたまるか。

「さて、そろそろ美少女になっちゃおうかな」

『Facerig』を弄り始めて10分ほどで事故も起きなさそうだと判断した俺は『Facerig』の画面に映つている背景を緑に変更する。こうすることで配信ソフト——OBSで『Facerig』をキヤップチャーし、エフェクトフィルタでクロマキーを追加すればあら不思議。背景の緑——グリーンバックが透過されて、可愛らしい美少

女が俺の生放送画面に登場。

「ここにちは」

サンプルアバターであるツインテールの女の子が生放送画面の左下に出現し、俺の声に合わせて口をぱくぱくと動かす。しかし、その女の子を見て俺は思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「あの、なんで……こんなにこの子、凛々しい顔してるの?」

通常であれば女の子らしい、可愛い表情を浮かべているのだが、何故か俺の顔をトラッキングするとキリつとしてしまうのだ。

——草

——メガネとか関係あるかも知れない

——本人が笑つてて草生える

「メガネは外してるんだよなあ……あ、他にもサンプルアバターあるんだけど」

そう言いながら次々とアバターを変更する。だが、ほんどのアバターは何故か凛々しい表情を浮かべてしまつた。眉毛か? 眉毛の形のせいか?

そう思いながら猫のアバターもあつたのでそれに変更。他の人間体のものとは違い、

目を見開くと黒目がキュッと細くなる仕様のようだ。

——ぬこだー

——顔で遊んでるでしょ

「いや、最初、絶対に遊ぶでしょ」

実際、すごく楽しい。左右に揺れればアバターも左右にゆらゆら。目を見開けばアバターもカツと見開く。しかし、どうしても俺の場合、凜々しくなってしまう。

——ウインクやつてみて

「ウインク？」

これでもウインクは得意だ。昔、『ウインクしてみて』と言われ、ウインクしたら『上手すぎて気持ち悪い』と評価をもらつたことがあるほど自信がある。もちろん、右目左目両方ともばっかり決められるぞ。

「……」

やつてみてわかつたが、アバターが言うことを聞かない時もある。リアルでは完璧な

ウインクをしているのだが、アバターはばつちり両目を閉じていた。何度かチャレンジしてみたが、どうやってもウインクできない。

「これ、難しいですねー。あははー」

そう笑いながらちらつと放送画面を見てみる。

そこにはニチャヤアという効果音が聞こえそうな笑みを浮かべる美少女アバターがいた。

「絶対、これ悪いこと考えてる顔じゃん」

普通に笑つただけなのにどうして、これほどの悪人顔になつてしまつたのだろうか。いや、笑い方が駄目なだけだ。きっと、女の子らしい笑顔も浮かべられるはず。そう思いながら満面の笑みではなく、口元を緩ませる程度の笑みを浮かべる。すると、女の子は先ほどとは打つて変わり、女の子らしい笑顔を見せてくれた。しかし、この表情のまま、生放送をするのは難しいだろう。おそらく放送中はあの悪人のような笑みを浮かべることになると俺は諦めた。

「あ、ウインクできた」

それからソーシャルゲームをしながらウインクの練習をしているとやつとウインク

ができるようになった。だが、瞬きをすると開けた目が閉じてしまう。

——失礼なんだけど、l i v e 2 d の動きがウインクできない人が頑張つてるときのそれ

「いや、マジで難しいんだって」

何度も練習した結果、首を少し傾け、右目を開ける時にわずかに顔を上に向けると右目を開けた状態で左目を閉じることができる。コツは右目を開ける際、ウェブカメラに瞳孔を向けること。今ではすっかりアバターでもウインクができるようになつた。

こうして、V T u b e r 活動二日目で『F a c e R i g』の扱い方を学ぶことができた。

しかし、まだ決めなければ——というより、話し合わなければならぬことがある。

そう、俺の生放送の最古参メンバー——相方になるかもしれない人との話し合いだ。

その話し合いはV T u b e r 活動四日目、毎週金曜日に行つてている定期生放送終了後に行われた。

俺に相方はできるのか。それとも一人でV T u b e r になるのか。それは次回のお

話で。

それでは、皆様、また、次のお話でお会いしましょう。

四ページ目：運命の日

定期生放送。それは配信者が特定の日時に必ず生放送をすることである。その利点は突発的な生放送よりも遊びに来てくれる人が増えやすいこと。

俺の場合、毎週金曜日の夜にニコニコ動画で生放送をしている。生放送の内容はソシャゲ、ゲーム、雑談、小説などその時の気分次第で決まるが基本的に思ったことをだらだら話しながら作業をしているだけだ。

この日、いつものように定期生放送をしていたが、少しばかり緊張していたかもしれない。何故なら、生放送終了後、件の最古参リスナーさんとの話し合いが行われる予定だつたからである。

「そういえば、昨日、マシュマロを設定してみたから適当に送つてみてくれない？」

最古参リスナーさんが来るまでいつも通りに生放送をしながらしつかりV T u b e r活動の準備も進める。V T u b e rになつたら匿名でメッセージを受け取ることができるマシュマロを使うと思っていたのでそのテストをしたかったのである。

——ねこねこしてみた（ふわふわなましゅまろ

「え、ほんと？ 見てみていい？」

謀クラフトゲームで鉱石を掘る作業をしているとリスナーさんの一人がマシユマロを投げてくれたようで早速、見に行つてみる。確かにマシユマロが届いていた。

「なるほど、こんな感じになるのか。うん、ありがと」

何事もテストは大事である。これでマシユマロを受け取り方やどのような感じでメッセージが届くのか把握することができた。

——ちっすー

すると、その時になつて最古参リスナーさんが満を持して登場。事前にSNSで来ることは知つていたが、約束通りに来てくれて一安心した。

「いらっしゃい。24時、ディスコードで。あ、あらかじめチャット送つてくれる？」

——わいも送つてみたよ

SNSで最古参リスナーさんに指示を出していると俺のアバターを作成してくれているリスナーさんも——俗にいう『ママ』になる人もマシュマロを送つてくれたらしい。だが、残念ながら今は最古参リスナーの方が優先なので、マシュマロは後で確認することにした。

それから1時間ほど女声の練習などをしながら（結局、美少女にはならないので意味はない）生放送を続け、日付が変わった頃に生放送を終了。

さあ、今後のV T u b e r活動の行方を左右する話し合いの始まりだ。

「こんばんはー」

生放送終了後、すぐに最古参リスナーさん——03さんに通話を掛け、ボイスチャットを始める。

03さんは7～8年前から俺の生放送に遊びに来てくれているリスナーさんである。

もちろん、今俺の生放送に来てくれるリスナーさんの中で最も付き合いが長い。まあ、一時期、忙しくて俺の生放送に来てくれなくなつたことはあつたが、最近は比較的遊びに来てくれている。

「時間作ってくれてありがとね」

「いえいえー」

「それで、早速話し合いをしたいんだけど……確か、ゲーム実況がしたいんだつけ？」

先日の生放送で打つてくれたコメントを思い出しながら本題に入る。V T u b e r はよくゲーム配信をしているイメージがあるのでゲームをすること自体に異論はない。ただ、ゲーム配信とゲーム実況は違う。

「うん、昔からの夢だつたからね」

「ゲーム実況つてことは動画を投稿したいの？ それともライブ配信でゲームをしたいの？」

「うーん、どっちも、かな」

その言葉に俺は思わず心の中で安堵のため息を吐いた。現在、俺はT R P G のリプレイ動画を投稿している。V T u b e r になつても投稿を続ける予定なのでゲーム実況動画も投稿するのは難しいと思っていたのである。

「——だから、ゲーム実況動画はちょっと俺はできないと思う」

「あ、そのことなんだけど——」

「どうやら、元々、03さんはリア友にゲーム実況動画を作る際、一緒にプレイしていくのないか、と声をかけていたらしく、数人のリア友に了承を得ていた。なるほど、それなら俺は主にライブ配信を担当し、03さんはゲーム実況動画を担当すれば幅が広がりそうである。」

「あ、もしかしてこっちの名義とか変えた方がいい？」

「いや、むしろ、03さん名義でやつた方がいいと思う。そうすれば03さんに興味を持つた人がこっちにも流れてくるだろうし」

最悪、ゲーム配信とゲーム実況の違いで03さんに断られるかもしれないと危惧していたので前向きに検討してくれているようで嬉しく思いながら話し合いを進める。

「でも、V T u b e rになるつてことは立ち絵とか用意しないと駄目だよね？ 間に合うかな」

「その辺りはちゃんと考へてるよ」

実は03さんが相方になるかもしれないと分かつた時点ですでにママと設定に関して打ち合わせを終えていた。

「実は俺のアバターなんだけどチャンネル登録数が一定数を超えると成長する、みたいな設定にしようと思つてるんだよ」

言つてしまえば、進化するアバターである。もちろん。そうした方がチャンネル登録数も増えやすいかも、という打算的な考えはあるが、何より重要なのが成長する前のアバターは成長した後よりも構造が単純である、という点だ。

アバターの制作を依頼したママはあまりLive2Dに触れたことがないらしく、不慣れなことが多い。そんな人が短時間で精巧なアバターを作るのはほぼ不可能だ。もちろん、時間をかければそれに見合つたアバターができるだろう。

しかし、申し訳ない話だが、俺は今すぐにでもVtuberになりたかつた。

今しかないと俺の中の何かが訴えかけていた。ただの勘かもしれないが、今までの人生、この勘に助けられたこともあつたので俺は基本的に自分の直感を信じるようにしている。

だからこそ、成長するアバター。

最初は単純な構造のアバターを使用し、チャンネル登録数がある一定数を超えた時点でアバターを作り替える。それがママに俺が提案した内容だつた。悪く言えば、時間稼ぎ、と言えるかもしれない。

打算的な考え方——チャンネル登録数増加の見込み。
中の人事情——時間稼ぎ。

そして、もう一つ。綺麗な言葉を使ってこの企画を説明するなら……皆の力を借りて成長するV T u b e r って面白そうだと思つた。

「この設定を03さんの立ち絵にも使う。例えば、チャンネル登録数1000人を超えた時点での3さんの立ち絵を解禁する、とかね」

そうすれば俺の初期アバターさえ完成すればV T u b e rとしてデビューすることができる。企業勢なら1000人はすぐに達成してしまうだろうが、俺たちはあくまで個人勢だ。1000人さえ届くかわからない厳しい世界だ。それを逆に利用する。厳しい世界だからこそ可能な時間稼ぎ。

もし、奇跡が起きてすぐに1000人を超えてしまつたら？ その時はその時の俺に任せろ。そんな奇跡が起きることさえ、想像できないほどの世界なのだから。「へえ、それいいかも」

「じゃあ、03さんのアバターはそんな感じで……でも、その前に言つておくことがあつ

てさ」

先日の生放送でV T u b e r活動を小説にすることを常連さんには話したが、03さんはその日は来なかつたので改めて説明する。

「だから、このやり取りも小説にするけどいい？」

「うん、いいよ」

「……正直、小説化も宣伝になるけど、その分、アンチも来るだろうから誹謗中傷があるかもしけないけど大丈夫？」

「いやあ、メンタル強い方なんで」

くすくすと笑いながらあつけらかんと答えた03さんに思わず苦笑いを浮かべてしまう。まあ、7～8年も付き合いがあつたのでそう答えるとは思っていたが、あまりにすんなり頷いたので拍子抜けしてしまつたのだ。

「小説化だけじやない。個人勢だからリスナーさんは思うように増えないだろうし……なにより、俺、多分、人生で初めて本気を出してるから——最後まで付き合つてもらうことになるよ？」

9年前、創作活動を始めた。それから少し経つてニコニコ動画で生放送を始めた。もう、9年だ。学生だつた俺はもちろん、俺より年下の03さんも社会人になつた。創作活動を始めたのは『話を書きたくなつたから』。

でも、生放送を始めたきっかけは少し違う。俺には目的、というより夢？　いや、違う。ちょっとした願い——『奇跡を望んで』生放送を始めた。

もし、有名になつたら叶うかもしれない望み。すっかり、生放送そのものを楽しんでいる現在も、心のどこかでその奇跡が起ることを願っている俺がいるのだ。

「うん、大丈夫。だって、もう何年も一緒にいるんだし」

「……そうだな」

話し合うことはまだたくさんある。問題もたくさんあるだろう。でも、コンビを組む

ことを阻む壁はもうなくなつた。

「それじゃ、よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします」

こうして、1時間にも満たない話し合いの末、俺たちは二人でVtuberになることを決意した。

「じゃあ、色々設定を決めるか。あ、その前に」

「どうしたの？」

「いや、俺のアバターを作ってくれてる人——ママがマシユマロ送つてくれたみたいで
それ見てなかつたなつて」

ホツと一安心した俺は設定を決める前にちよつとした雑談目的でママから貰つたマ
シユマロを食べることにした。

『デュフフ・・・

ねえねえホツシー・・・

ママつてえ・・・呼んでみてえ！
デュフ・・・』

「クソマロじやねーか！」

「あははは！」

これが俺たちがコンビを組むことになつた経緯。

だが、この通話はまだ終わらない。コンビを組むことになつたらやろうと思つていた
ことがあつたからだ。

V T u b e r になるにあたつて必要な物は多い。その中でもアバターと同じくらい
大切な物がある。

そう、チャンネルだ。

この小説を読んでいる読者様はすでに俺のチャンネルに飛ぶことができるだろう。しかし、そのチャンネルがどのようにできたのか。それは次回のお話で。

それでは、皆様、また、次のお話でお会いしましょう。

五ページ目：チャンネルができた日

「あ、ママも来れるつてさ」

「おー」

俺に相方ができた後、設定やアバターの話をするためにママも呼んで3人で通話することになった。まあ、通話と言つてもママは基本的にチャット参加なので話しているのは俺と03さんだけだったが。

「それでとりあえず、色々設定を決めてチャンネルを作りたいんだけど。03さんはどんな感じの子がいいとかある？」

「うーん、すぐには思いつかないなあ」

それもそうだ。たつた数分前にV T u b e rになることが決まったのに設定なんてすぐに思いつくわけがない。

「なら、まずは俺の設定なんだけど——」

アバターの話はしたが、まだ俺のキャラの設定に関して詳しく説明していなかつた。今後の活動方針も決めるのに必要な設定なのでその内容は03さんに話す。

簡単に説明すると俺のキャラは地球外生命体で色々あつて日本に墜落してしまつた。

その時の衝撃で体に異変が起こり、チャンネル登録数が増えると成長する。まだ、細かいところは決めていないが、だいたいはこんな設定だ。

「面白いと思いますよ。それでいきましょう」

説明が終わると03さんは笑いながらゴーサインを出してくれた。ここでダメ出しをされたら自分のアバターそのものも却下するしかなかつたので安心する。

「それで03さんのキャラの設定なんだけど結構絞られそうなんだよね」「具体的には？」

「神か、宇宙船のA.I.」

「あ、なるほど。天の声的なポジションか」

「そんな感じ。最初、立ち絵がないのもエネルギーが足りないから音声だけしか送れな
いってことにもできるし」

それから03さんのキャラに関して話し合い、最終的に03さんは神様のお導きに従うことにした。

「じゃあ、サイコロ振るわ」

「いいのかそれで。まあ、いいか。1で神。2でA.I.——3でその他ね」

「え、増やすの？ ま、いつか！」

突然、選択肢を増やしたのにすぐにそれを受け入れてサイコロを振る03さん。通話

では見えないのでドキドキしながら結果を待つ。

「……3！」

「その他！　え、マジか」

「その他って何？　他に候補あるの？」

「じゃあ、魔法使いとか？」

「いいねえ」

しかし、これで決めてしまうのは神のお導きと言えるのだろうか。いや、違う。やはり、最後はサイコロの目に決めてもらわなくては意味がない。

「じゃあ、1で神。2でA.I.。3で魔法使い。4でその他で」

「オッケー。じゃあ、振るね」

再び、03さんがサイコロを振る。ここで4が出ればまた候補が増えて振り直し。しかし、神様は俺たちの遊戯に付き合う気はなかつたのか、結果はすぐに決まった。

「2！」

「なら、A.I.だな」

もう少しこのノリを続けたかったが、神様が決めたのなら仕方ない。03さんのキャラはA.I.で進める。チャットでママも『いいね』と言つてくれた。

「じゃあ、03さんの設定も決まつたし……チャンネル作るわ」

元々、チャンネル開設は早めにするつもりだった。理由はもちろん、小説化した時に登録するチャンネルがなければ宣伝にならないからである。だが、問題が一つ。「チャンネルの作り方ってわかる?」

「さあ?」

そう、誰もチャンネルの作り方を知らないのである。

とりあえず、Gmailが必要なのは知っていたが、それはすでに作ってあるので問題ない。しかし、具体的にどうやってやるか調べていなかつたのだ。

善は急げとグーグル大先生に質問を投げるがマイマイチわかりやすいサイトが見つからず、どうしようかと少しばかり困ってしまった。

「あ、そういうえば、友達にチャンネル作った人いるから聞いてみる?」

「お、それじや、お願ひできる?」

そんな俺の様子を見た03さんがすぐにその友人に連絡を取り、チャンネルの作り方をわかりやすく説明した動画を紹介してくれる。

(お、これならいけそう)

その動画を見ながらチャンネルの作成を始める。どうやら、チャンネルは先ほども言つたようにGmailを基に作るようだが、基となるチャンネルさえ作つてしまえば更にいくつもチャンネルを作ることができるのでらしい。その動画では『親チャンネル』、

『子チャンネル』と呼んでいた。俺もそれに倣つて子チャンネルを作成。

「チャンネルの名前、どうする？」

「そこは任せるよ」

「じゃあ、『ホツシーの宇宙船』にしよう」

それから何度も躊躇ながらもなんとかチャンネル開設を終わらせ、概要欄に必要事項を書くところまで辿り着いた。

「概要欄には俺の活動してるサイトのURLでも貼るか」

まずは小説を投稿している3つのサイトと動画と生放送をしているニコニコ動画、Twitter、あとはマシュマロも必要か。

「いや、多いな。URL貼るの大変なんだけど」

それだけ色々な活動をしてきた、ということなのだろう。だが、一つ一つのサイトに飛んでURLをコピーし、それを概要欄に貼る作業は正直、面倒だった。

「よし、できた。このチャンネルのURLをTwitterに貼つて」

チャンネルが出来たら今度は別のサイトにそのURLを貼る。ついでにTwitterの自己紹介欄もVtuber仕様に変更。この時点ではチャンネル開設作業開始から1時間以上経っていた。なお、この間、03さんとママは普通に雑談していた。

「お、おし……」これで完成した、と思う

作つたばかりで宣伝もしていないため、もちろん、チャンネル登録数は0。でも、チャンネルがあるだけで俺たちはV T u b e rになるのだ、と実感させられる。

「おー、できたね」

「ちゃんと飛べる?」

「飛べる飛べる」

リンクもきちんと繋がっているようどりあえず、チャンネル開設の作業はこれで終了だ。これでいつでも小説を投稿することができる。一文字も書いていないけれど。

「それじゃ、チャンネルもできたから今日はこの辺でお開きにしますか」

「はーい」

「あ、明日、自己紹介動画の台本作るから集まれる?」

「多分、大丈夫です」

こうして、俺たちのチャンネル——『ホツシーの宇宙船』が完成した。まだ始まつたばかりでこの先、どうなるかわからないが、とにかく今はチャンネルが完成したこと喜ぼう。

「あ、そうだ。このディスコードのグループも名前変えるか」

「何にするの?」

「そうだな……『宇宙船の内部』にしよう」

カタカタとキーボードを叩いてグループ名を変更する。ここを拠点にして活動に関することを話し合おう。

さて、なんとかチャンネルが完成し、俺たちのV T u b e r活動も本格的に始まつた。そして、次の日、『俺のV T u b e r活動日誌』が投稿される。もちろん、小説化もすんなりできたわけではない。それは次回のお話で。

それでは、皆様、また、次のお話でお会いしましょう。

六ページ目：V T u b e r活動を始めた日

創作、といつてもその種類は多岐にわたる。

絵、小説、動画、ゲーム制作などパツと思いつくだけでもこれだけの種類があり、更に一次創作や二次創作とジャンル分けをするとそれはまさに無数に存在している。

その中でも俺が選んだのは小説だった。

そもそも小学校から本を読むのはそこまで嫌いではなく、作文を書く時は決まってクラスで一番に書き終わり、先生に提出していたので元々文章作成能力はそこそこあつたのだろう。

それから時は経ち、高校生になつて初めてライトノベルという存在を知り、ドハマリしたのだ。最近はもうほとんど読んでいないが500冊ほど本棚に収まっている。

そして、ライトノベルを読むにつれ少しづつ『こうなつた場合はどうなるのだろうか？』と思うようになり、試しにノートに書いたのが俺にとつて初めての創作物だった。それがライトノベルを知つてから2か月ほど経つた頃の話。

一度書いてしまえばその後はもう当たり前のように自分の妄想をノートに書き連ね、自己満足するようになった。小説を書き始めて数か月でオリジナルにも手を出し、パソ

コンで書くことを覚え、物書きにのめり込んでいった。

俺が創作活動を始めて半年、俺は今もなお続いている『東方楽曲伝』を書き始めた。その頃の文章力は当時のままの状態で投稿しているので読めばわかると思うが、素人丸出しそのもの。だが、俺は夢中になつて書いた。アイディアがどんどん浮かび上がり、書きたくてたまらなくなり、書いて、書いて書いて書いて書いて。サイトに投稿することには30話ほどストックがあるほどであり、3日に1回更新という今思えばなかなか無謀な更新スピードで投稿していた。なお、現在は週1更新である。

しかし、書く作業は文章のバランスや言葉選びなど時間がかかる。そのため、アイディアばかりが溜まっていく。それが伏線を仕込むにあたってとても役に立った。

『東方楽曲伝』で例えるなら2012年に投稿した第2章に仕込んだ伏線を2017年に投稿した第9章で回収した。前にネタバレが大丈夫な人に『東方楽曲伝』について数時間にも渡つて今後の展開を説明した時など伏線を仕込みすぎて『頭おかしい』と言われたほどである。

それも俺の小説の書き方のせいだ。俺の場合、書き始める前からすでに終わり方を決めて書くのでどこでどんな伏線を仕込めばいいのか、わかるのである。『東方楽曲伝』が完結した記念生放送の際に過去の俺が書いたネタ帳を開いてみたらほとんどそこに書いてある通りに話が進んでおり、終わり方さえ当時に決めたままだった。

「……」

しかし、今回、俺が書こうとしているのは『ノンフィクション』。終わり方どころか今後の展開が一切読めないまさに見切り発車の小説。だからこそ、第1話を書く時、大いに悩んだ。

第1話の内容はまさに俺がV T u b e rになろうと決意した日のお話。まだ数日しか経つていなかつたので記憶が不鮮明になつていたわけではない。それでも、どう書けばいいかわからなかつたのである。

(とりあえず、俺のことは書かないとな)

物語の書き始めたやはり、世界観や設定、主人公について説明しなければならない。そうしないと一体、これはどんな話なのだろうと読者が混乱してしまう。

しかし、説明ばかりでは何も面白くない。『ノンフィクション』だが、あくまでこれは物語だ。ただ状況説明するだけでは何の意味もないのだ。

俺が目指しているのは執筆系V T u b e r。ライブ配信や動画には向かない創作で勝負する。

もちろん、己が天才だとは思っていない。もし、そうなら『東方楽曲伝』を始め、これまでに書き上げた作品たちはもう少し日の目を見ることができただろう。これも俺が未熟なせい。でも、未熟だから面白くない作品でいい、なんてことはないのだ。

やるからには全力で。
書くからには面白く。

作り出すのなら最後まで責任を。

これが俺の創作活動をするにあたつて掲げる信念。すでに更新が止まつて いる作品は数多く存在しているが、可能な限り、この信念を曲げるつもりはなかつた。

俺が俺の作品を面白いと思うものではなければ、他の人が読んでも面白くない。だから、俺の作品のファン第一号は俺であり、続きを一番待ち遠しく思つているのも俺だ。

「……」

だが、今現在進行形で書いているこの話は——面白くない。先ほど言つたようにただの状況説明。ところどころに心情描写を入れているが申し訳程度であり、何も訴えかけでこない。

そう思いながらもとりあえず、最後まで書き上げた。第一話の完成である。

そして、すぐに前半の大部分を削除した。面白くない、と自分で書いた文章を睨みつけながら。

状況説明は大事だが、多すぎたら駄目。

しかし、それを疎かにすればどんな物語かわからないまま、終わつてしまふ。

「……よし」

氣を取り直して前半部分を書き進める。使えそうな部分はそのままに。変なところは修正。そんな単純作業を続け、やつと人に見せられるレベルまで上げることができた。

(まだ、何かできるような気がする……けど、俺の実力では無理だな)
きっと、俺以上に文才のある人ならもつと上手く書けるのだろう。だが、これが俺の全力だった。完璧な出来に仕上げることができなかつた作品に申し訳なく思いながらも——俺は好きだと思った。

V T u b e r になることは決意したけど、本当にどうしていいかわからない拙さ、のようなものが滲み出ている。そんな感想を抱いたのだ。

そして、それこそこの小説で伝えたいことだつた。

確かに物語として書くのなら面白い方がいいし、完璧であつた方が人も見てくれるだろう。

だが、あくまでこれは俺が実際に体験したこと書き連ねる物語。

この拙い小説も、俺が実際に書いた物語だ。俺だけにしか書けない、俺だけの物語なのである。この作品ばかりはどんな人であつても書くことができない、俺だけのものだ。

T w i t t e r で『V T u b e r になろう』と呟いた。

生放送では俺がV T u b e rになることを伝えた。

仮だが、美少女になつた。
相方ができた。

チャンネルも開設した。

だが、これらはただの準備にすぎない。まだ、俺はスタートラインに立つてゐるだけ。すでに先駆者たちはずつと前を走つてゐる。存在は知つてゐるのにその背中は全く見えない。彼らの背中を見る事ができるのだろうか。追いつけるのだろうか。追い越せるのだろうか。

いや、そんなことは後。まずはスタートをするところから始める。話はそれからだ。
今し方書き終えた文章を小説投稿サイトの投稿画面にコピー&ペースト。必要事項を埋め、あとは投稿ボタンを押すだけとなつた。

「すう……はあ……」

さあ、始めよう。この小説を投稿して初めて俺のV T u b e r活動が始まる。ここから俺は——俺たちは走り出す。ゴールの見えないどこかへ向かうために。

これが俺のV T u b e r活動日誌、最初のページだ。

でも、最初から話数を『ページ』にするのは少しばかり、勿体ない。

なら、小説を書いた時のことと書いた時に全てを修正しよう。そうした方がいいような気がした。だから、とりあえず、『第1話』として投稿する。それがこの小説で最初に仕込んだ誰も知らない伏線。最初から『ページ』ではなく、『第〇話』と投稿した理由だ。

さて、これを読んでいる頃には全てのサイトの話数が『ページ』に変わっているだろう。でも、確かに俺は最初の五話だけ『第〇話』と表記して投稿した。その事実だけは知つていて欲しい。それもまた、俺が実際に体験したことなのだから。

こうして、俺のV T u b e r 活動は始まつたが、まだ問題はたくさん残つていて、デビューするまでの日々はもう少しだけ続く。
次に語るのは——ライブ配信に関する準備。あまり書くことはないが、少しだけ付き合つて欲しい。

それでは、皆様、また、次のお話でお会いしましよう。

七ページ目：調べ物をした日

唐突だが、この世には様々な権利が存在する。

平等権、財産権、生存権、選挙権、生殺与奪権。そして——著作権。

特に著作権はY o u T u b eでライブ配信をするにあたつて気づかぬ内に侵害してしまう可能性があり、注意しなければならない事柄の一つだ。

「なので、今日はフリーのB G Mを探します」

いつものように生放送をしながら準備を進める。リスナーさんももう慣れたのか、『はーい』といった感じで特に驚いた様子もなく、普通に受け入れていた。生放送のタグにわざわざ『自由奔放生放送』と入れるほどタイトル詐欺は当たり前として突然別のことをやりだしたり、寄り道したりと突拍子もない行動を取ることが多い。そのため、常連であるリスナーさんからしてみれば生放送中にライブ配信の準備をするぐらいなら慣れているのだろう。

「と、言つてもまだ何も調べてないんですけどね。多分、サイトとかあると思うんだけど

——YouTubeにフリーBGMの動画あるみたいですよ

そう言いながらグーグル大先生に質問しようとしました時、リストナーさんから情報を貰う。その後、コメントに貼られたURLに飛び、その動画のBGMを視聴する。

「おー、すごいいい曲。でも、今は雑談用BGMを探してるからこれは使えないかなあ」

——まあ、例えの一つなので参考程度に

リストナーさんが貼ったURLの動画はどちらかというとおしゃれなジャズといった雰囲気の曲だつたため、残念ながら見送ることに。

それから関連動画に表示されていた動画をいくつか視聴するが、なかなかピンと来るBGMがなく、動画から探すのを断念することになつた。

「なかなかないもんだねえ……お、これいいんじゃない？」

サイトを転々と移動している最中、雑談用BGMとして使えそうなものを発見。きちんと著作権フリーか確認し、大丈夫そうだったので早速ダウンロードする。更にもう一個、雰囲気の違うBGMを見つけ、それも保存した。

「とりあえず、使うのは二曲目にしようか……じゃあ、とりあえず、今日はこれをかけたまま、生放送しよう」

ダウンロードしたBGMをリピート再生し、音量を調節。リストナーさんにバランスを確認してもらつて調整は終了した。

「じゃあ、今日はもう一つやりたいことがあつてですね。ほら、よくライブ配信でコメントが画面で流れるじやん？　あれのやり方を調べたいと思います」

VTuberのライブ配信を見ているとよく画面にリストナーさんが打つたコメントが下から上へ流れている。個人勢なので有名なVTuberたちのように目で追えないほどコメントを貰えるとは思えないが、可能なら同じようにコメントを画面に出せるようにしたかったのである。

「えつと……ん？　これじやないな」

しかし、検索ワードが悪かつたのか、なかなかお目当てのサイトに辿り着くことができず、グーグル大先生に何度も質問することになってしまった。その間、リストナーさんはリストナーさん同士で和気藹々とコメントで会話しており、生主である俺のことは放置

している。

「あ、これかな」

どうやら、コメントを画面上で流すためには配信ソフトと『Chat v2.0 Style Generator 日本語版』を使用するらしい。配信ソフトはOBSを使用しているため、変更する必要はない。それからやり方が載ったサイトを読み進めーーー。

「あー、これ、ニコニコ動画じやできないっぽいね」

OBSにYouTubeのチャットURLをコピー&ペーストする必要があり、現状では使用は不可。因みに『Chat v2.0 Style Generator or 日本語版』はコメントの背景を切り抜きするために使用するらしく、切り抜く必要がなければ使わないようだ。

「うん、これに関してはライブ配信できるようになつてからだな」

他人の配信でテストができるようだが、アバターが完成していない以上、焦つて確認することでもないので後回しにしてもいいだろう。そう判断してサイトをブックマークして今日の調べ物は終了した。

「……ところで、BGMどう？ 全然触れてくれないけど」

——触ることすら忘れるほどマツチしてゐるわ
——いいんじゃない?

「なら、本番もこれを使うか。じゃあ、今日のやることが終わつたので別のことをします」

生放送タイトルを手早く変更し、生放送を続ける。もちろん、リスナーさんも戸惑うことなく、会話に戻っていく。生主が置いていかれる生放送。それがいつもの俺たちだつた。

さて、今回のお話はさほど盛り上がるることもなく、終わった。現実問題、まだV Tu berにすらなつていないため、こうやって小説にするほどのこともない。

そのため、次回は少しばかりだが、ニコニコ生放送の様子を見せたいと思う。V Tu berになつた後、同じような雰囲気でライブ配信できるか定かではないが、一つの記録として残しておきたいのである。大した生放送ではないかもしねいが、お付き合いしていただけると嬉しい。

それでは、皆様、また、次のお話でお会いしましょう。

八ページ目：挨拶を決めた日

この世界には無数のゲームが存在しており、そのジャンルもアクション、格闘、ホラー、シユーティング、リズムと数えきれない。また、アクションホラー、と複数のジャンルを組み合わせたゲームもある。

そして、V T u b e r にとってゲーム配信は切つても切れないものであり、ほとんど の V T u b e r はゲーム配信を行つて いた。もちろん、まだ V T u b e r として デ ビューして いない自分もニコニコ生放送でゲーム配信は何度もしている。そんなゲーム配信の中で、俺が定期的にしているのは——。

「では、今日もブランチマイニングしていきまーす」

——M ○ n e c r a f t のブランチマイニング放送である。

そもそもBranch（枝）とMining（採鉱）を組み合わせた造語であり、木の枝のように細い坑道を広げて貴重な鉱石を効率よく発見、採掘する、Monocraftのテクニックだ。

このブランチマイニングをただ垂れ流す生放送こそ『ブランチマイニング放送』である。Monocraftのデータが飛び、数年ほどやつていなかつたが最近、復活したのだ。それからというもの、週1ペースでこの放送を行うほどブランチマイニングを愛していると言つても過言ではない、

「とりあえず、メイン通路を3キロ掘るまで今日はやるかな。もう少しだし」

そう言いながら手早く荷物を整理してブランチマイニング場へ降りる。そのまま途中まで敷いたレールで最奥まで移動し、石ピッケルで掘り始めた。

——來たよー

「あ、03いらっしゃーい。待つてた」

放送日が休日ということもあり、相方の03がいつもより早く放送に来た。丁度、03に用事があったのでこれ幸いにと通話を繋ぐ。因みに普段のプランチマイニング放送では他のリストナーさんも交えて通話するのだが、今回ばかりはリストナーさんには遠慮してもらつた。

「こんにちはー」

「こんにちはー、いらっしゃい。あ、通話はできないけどマルチは大丈夫なので勝手に入つてきていいですよー」

03に挨拶しながらリストナーさんにそう言うとゲームにリストナーたちが入つてくる。基本、自分はプランチマイニング場に籠るので地上や拠点の改造はリストナーさんに任せているのだ。

「あ、03も入つてきていいよ」

「はいはーい」

「それで今日なんだけどちょっと決めたいことがあってね」

「ほー」

ピックルで掘りながら話を進める。元々、03が来ても来なくても話そうと思つていたのだが、やはりコンビを組むにあたつて今から話すことは一緒に決めたかつた。

因みに生放送の画面では丁度、マグマ溜まりに出てしまい、マグマを処理する準備を進めている。

「それで決めたいことなんですかけど……ほら、よくV T u b e rでさ、タグとか決めてるじゃん？」

——タグ？

「タグっていうか、挨拶とかあるじやん。あれをみんなで決めたくて」

「あー、いいんじゃないすか？」

「いや、君にも関係あることなんだけど適當過ぎない？」

「あはは」

03の適当つぶりに少しばかり苦笑しながらもマグマ溜まりの処理を続ける。天井にカーソルを合わせて砂利を設置。砂利は下にプロックがなければ下に落ちるため、そのままマグマの中へ。それから砂利がマグマから顔を出すまで砂利を落とし続ける。「やっぱさ、こういうのはこれまで俺の放送を見ててくれた皆で決めたくてさー」

「おー、いいっすねえ」

「雑か！」

03の発言にツッコミながらマグマ処理を終えたので再び掘る作業に戻る。なお、コメントではマルチに参加しているリスナーさん同士が建築について話し合っていた。

「それで一応、締めの挨拶は決めてるんだけどまだ最初の挨拶が決まってないんだよね」

——なんで締めだけ決めてんだよw

——これ、どうします？

——これでどう？

——おー、いいっすねえ

「なんか締めだけはすぐに浮かんだんだけどどうしても最初の挨拶だけ思いつかなかつたんだよ」

「おー、拠点めっちゃ変わってるー」

「君はこつちに興味持とうね」

大半のリスナーさんとO3はMinecraftに夢中でこちらの話に集中していなかつた。とりあえず、最初の挨拶を募集していることは伝えたので自分もプランチマイニングの作業に戻る。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……え、何もないの？」

しばらく黙つて作業していたが、コメントも特に反応もなく、時間が過ぎていき、ツッコミを入れてしまつた。このままでただ俺がプランチマイニングする映像が流れる生放送になつてしまふ。リスナーさんにも『絵面が地味』、『地上組の方が取れ高ある』と何度もツツコまれているため、すでに手遅れなのだが。

「いや、ちょっとこっちの作業してて」

「特に君はもつと真面目に考えて欲しいんだけど」

「だつて、急に言われてもわかんないよ」

「そもそも、と納得する反面、このままではいつまで経つても挨拶が決まらないと僅かに危機感を覚える。

——そもそもなんで決めるの？

「まあ、いろんな VTuber が特定の挨拶があるし、挨拶があれば覚えてもらいややすいかなって」

「あー、確かに」

「因みに締めの挨拶は最初の挨拶が決まってから発表します」

——でも、決めてない VTuber もいるぞ

——何故、勿体ぶるw

——あ、ここ、いいですね

——じゃあ、地上行つてくるわ

マルチ参加組は完全にM〇necraftの話をし続け、他のリスナーさんが挨拶について質問してくる。とりあえず、その時にダイアモンドを見つけたので慎重に採掘した。

「でも、いろんな挨拶あるよね。ほら、よく『こんにちは』の『こん』付けるじゃん」「……いや、考えたよ？ そりやあ、一番最初にそれが思いついたんだけどさ」

03の発言に少々言葉を詰ませながら話を続ける。V T u b e rの挨拶はよく自分の名前を入れることが多い。俺のV T u b e rネームはほとんどのアカウントで使っている『ホツシー』だ。それと『こん』を組み合せた結果、出来た挨拶は——。

「——『こんほし』。なあ、めっちゃだせえんだけど」

「だっさ！ やつば！」

——だせえ wwwww

——これはダサい

——これはないわあ

『こんほし』に03が大爆笑している中、ダサいとコメントが流れた。予想通りのリスナーさんの反応と、いつまで経ってもゲラ笑いが止まらない03に戸惑いながら話を進める。

『こんほし』はないって！ だから、意見を求めてんだよ！ てか、どんだけウケてん

のさ！」

「だつて、『こんほし』……やばい……」

どうやら本格的にツボに入つてしまつたらしい。03のことは諦めて改めてリスナーさんに挨拶を考えてもらう。その間に何度目かわからぬマグマ処理も同時に進行する。

「でも、できれば『ホツシー』に纏わる挨拶がいいんだよ。名前が入つてないと誰つてなるしさ」

「あー、笑つた……これ、忘れた頃に『こんほし』言つて欲しいわあ」

——セイハローは？

「セイハロー？ ここにちはつて言え？」

なんとか復帰した03を放置して流れたコメントを読む。セイは『Say』という意味だろう。まさかリスナーさんに挨拶を強制する？

「……あ、なるほど！ 星か！」^{セイ}

だが、すぐにコメントの真意に行き着く。確かに『ホツシー』と結びつく単語も入つてゐるし、語呂もいい。少なくとも『こんほし』より何十倍もいい。まあ、『こんほし』がダサすぎるだけなのだが。

——少なくともこんほしよりいいと思う

「こ、ん、ほ、し！　あはは！　あはははは！」

「笑いすぎだろ、お前」

「駄目！　一回、ゲラつたらもう駄目なの！」

「はい、決定！　最初の挨拶は『セイハロー』で！」

不意打ち気味に『こんほし』爆撃を受け、見事撃沈した03にツツコミながら『セイハロー』を採用。これで今日の最難関を乗り越えた。

「じゃあ、最初の挨拶が決まつたので、次は締めの挨拶ね……な、なんか改めて言おうとすると恥ずかしいな」

そう言いつつもせつかく決めた挨拶なので何度も咳払いしつつ、03が落ち着くのを

待つ。数分と経たずに03の呼吸が整った。

「それで締めの挨拶なんですが……宇宙船から配信しているということで『以上、通信終了！』にしたいんだけどどう？」

「あー、いいんじゃないっすか？」

「雑過ぎない？」

締めの挨拶に関しては特に反対意見もなく、半ばスルー気味に決定する。これで挨拶は決まつたので次に進む。決めることはまだまだあるので03とリスナーさんにはもう少し付き合つてもらおう。

「あ、その前に手持ちいっぱいだから一回帰るわ」

「ういー」

少しばかり長くなりそうなので今回のお話はここでおしまい。次回はタグ決めの様子を書こうと思う。

それでは、皆様、また、次のお話でお会いしましょう。

九ページ目：タグを決めた日

「それで話の続きをなんだけど」

拠点に戻るためにトロツコに乗りながらタグ決めの話に戻る。ブランチマイニング場はメイン通路にレールを敷き、左右にどんどん通路を増やしていくやり方を採用しているため、拠点に戻る度に少しばかり時間ができるのだ。

「とりあえず、決めたいのは配信のタグかな。これも名前の一部とか付けたいよね」「ライブ配信のタグだよね？『ほしライブ』とか？」

『こんほし』と同じ匂いするんだよなあ

それに『ほし』はよく名前に付くことがあるので安易に付けたら被つてしまふ可能性が高い。あと、ありきたりすぎて目立たないので。わかりやすいのも大事だが、なにより個人勢の場合、目を引くタグでないと興味すら持つてもらえないだろう。

『ホツシー』という名前に関係してて、目立つし、わかりやすいタグ。さあ、皆さん、考えてください

「難しくない？」

「なお、ファンアートのタグはすでに考えてます」

——何故、ファンアートのタグは思いついてんだw

——また、勿体ぶるw

「すぐに思いついたんだよ……マジで配信タグが思いつかなくてな」

道具整理を終わらせ、再びブランチマイニング場へ。なお、拠点滞在時間は僅かに5分である。鉱石を置き、不足した道具を補充し、並べ替えただけだ。

——確か、宇宙船に乗つてるって設定だつたよね？

しばらくひたすらブランチマイニングする映像が流れた後、リスナーさんの一人がそんな質問を投げかけてきた。そう、『セイハロー』を生み出したリスナーさんである。「そんな感じ。宇宙船で不時着しちやつて色々あつてV T u b e rをすることになつた」

——なら、宇宙船の名前とかは？

「いや、決めてないけど」

なるほど、宇宙船の名前か。特に考えていなかつたが、確かに決めておけばこの先、使えそうである。だが、いきなり宇宙船の名前を決めろと言われてもさすがにすぐには思いつかない。

——それで、その宇宙船から交信してて感じにすればいいんじゃね?

「……○○から交信中つて感じかな」

突然、Twitterで『○○より交信中』とタグが流れてきたら目を引きそうである。宇宙船の名前も『ホツシー』に関係することにすれば――。

「……宇宙船の名前かあ。うん、ちょっとこれは俺が決めていい?」
「うん、いいよ」

——『ホツシー』に関係する名前にすればわかりやすいのだろう。でも、どうしても付けたい名前があつた。

名前には関係ないが、俺らしい名前。

よく聞く名前だが、わかる人にはわかる、俺にとつて特別な名前。
(まあ、多分、わかる人は少ないだろうけど)

心の内で苦笑しながら、それでもはつきりと宇宙船に名前を付ける。

「宇宙船『キキョウ』」

キャラテン『ホツシー』は宇宙船『キキョウ』に乗り、地球の近くを飛んでいた。しかし、その途中、小さな星と激突し、地球へと不時着。その後、宇宙船『キキョウ』に搭載されていたAI、『03』と共にVTuberになることを決意する。どうして、V

Tuberになる必要があるのか、それはここではあえて語らないが、チャンネル登録数が一定数を超えると成長するVTuberとして活動するのだ。

「じゃあ、配信タグは『キキョウより交信中』で決定だな。それなら締めの挨拶も『通信じやなくて『交信』にするか。なんか『通信』と『交信』に違いつてあるのかな?』

——あんまりないつぽい

「なら、『交信』の方が宇宙人っぽいからそつちにしよう」

リスナーさんがパパっと調べてくれたおかげでスマーズにタグが決定した。少しづつ形になっていく様子に自然と笑みが零れる。

「それでファンアートのタグなんだけど、英語表記で『^ス_タ^ラ_タ^イ_ト Starwritter』にしようと思つてます」

——描くつて drawじゃない?

——英語のタグつて使いにくそう

「スタードローつて語呂悪いし、執筆系VTuberを目指してから『書く』つて意味

の『write』ともかかつてゐるんだよね。タグに関してはコピペして使つてもうことにしました』

リストナーさんの意見に答えると納得してもらえたのか、特に反対意見もなく、ファンアートのタグは『Starwrite』になつた。これで予め考えていたタグは全て決め終わつたのでホッと一安心。

しかし、本当の地獄はここからだつた。

「他に決めるタグつてあつたつけ？」

——終わつたんじやね？

——一回帰つてきて。寝たい。ファンタムうじやうじやいるんだけど
——ファンタグは？

「ファン？ あと、ブランチマイニング中だから帰れないわ」

マルチに参加しているリストナーさんのコメントを一蹴しながら確かにファンの呼び方を決めておかなければならぬだろう。まあ、そこまでファンが増えるかどうか不安だが。

「ファンかあ……全く考えてなかつたなあ」

少し考えてもアイデイアが全然出てこない。そもそもファンができるとは思っていなかつたので完全に不意打ちだつた。

「なんかアイデイアある？」正直、思いつく気がしないんだけど」

——メイトとかは？

「クラスメイトのメイト？ あとはソウルメイトとか？」

どうやら、メイトとは『友達』という意味があるらしい。確かにそれならファンタグに使えるだろう。

「あとはこれをどう『ホツシー』に融合するかだな」

——それが難しすぎるんですけど

「そりゃなんだよなあ」

『ほし』がありきたりすぎて安直に融合すると途端に『こんほし』臭がぷんぷんするのである。『ほしメイト』とかダサすぎて考えた瞬間、宇宙の彼方へ放り投げるレベルだ。

——あと、メイトって男友達って意味っぽい

「男友達か……なら、一応、保留して別なの考えてみるか」
だが、30分以上経つてもそれ以上の案が浮かばず、結局、『メイト』を使つたタグに
することにした。

「もう、宇宙か？ 宇宙っぽいのでもいいよ」

——プラネット？

「……プラネットメイトか」

とりあえず、語呂はいい。直訳は『惑星の男友達』だが、それぐらい緩くてもいいかも
しれない、と思えなくもなかつた。きっと、考えすぎて感覚がマヒしていたのだろう。
「じゃあ、プラネットメイトにしよう。あとはデビュー配信で遊びに来てくれたりス
ナーさんに意見を聞いて変えよう」

ほぼやけくそ気味に終わつたが、これで必要最低限のタグは決めた。
最初の挨拶、『セイハロー』。

締めの挨拶、『以上、交信終了』。

配信タグ、『キキョウより交信中』。

ファンアート、『Starwrite』。

ファンタグ、『プラネットメイト』。

ファンタグが異常に浮いているが、一先ずこのままで行こう。あとはデビュー後の俺に任せればいい。因みに『セイハロー』、『キキョウより交信中』、『プラネットメイト』を決めたのは一人のリスナーさんである。

——全部、俺の意見じやんw

「マジで助かつたわ、ありがと。それじゃ、タグも決め終わつたので今回の生放送はここまでにしましよう」

「はーい」

こうして、ブランチマイニング改めタグ決め放送は終了した。いつものようにグタグタだつたが充実した生放送だったので満足である。

では、毎度お馴染みのちょっとした次回予告。次話で書くのはまだ書いていない俺の活動——サークルについて。まだ一冊も本を作っていない出来立てのサークルだが、それについて語りたいと思う。

それでは、皆様、また、次のお話でお会いしましょう。

十ページ目：サークルについて話した日

今までこの小説を通して様々な活動を紹介してきたが、実はまだ話していないことがある。それがサークル。

それでも9年間、小説を書いていた身だ。やはり、どんな形でもいいので本を作る、ということに憧れていた。しかし、俺は小説しか書けない。本を作るにあたって挿絵や表紙にその小説に登場するキャラの絵を使いたかったのでなかなか行動に出ることができなかつたのである。

もちろん、お金を払つて絵師に注文するという方法もあつた。だが、具体的な方法もわからず、他にもやることがあつたので先延ばしにしていたのだ。

そんな時、試しにニコ生で声をかけたところ、なんと数人の人がサークルに参加したいと声をあげてくれたのである。

「じゃあ、定期会議を始めまーす」

この日も月一で行われている定期会議の日だつた。メンバーは自分の他に絵師が三人、マネージャー的な立ち位置の一人。計5人で構成されているサークルだ。因みに絵師の一人が俺のアバターを書いてくれたママである。

「まあ、今回も進捗状況の確認なんだけど、どう？」

まだ結成してから一冊も本を出していないが、準備は少しずつ進んでいる。特に俺の場合、小説は完成しているので後は細かい修正だけであり、今は挿絵や合わせて販売するつもりのラミカ用のSD絵待ちだった。

だが、正直、本が完成しても最近はイベント自体、延期になることが多い。そのせいで作業がずるずると先延ばしになっていたのは事実だ。

そして、今日はいつもと違い、俺は少しばかり緊張していた。皆の進捗状況を確認し、それを話す時が来る。

「あのー、実は他にも報告があつて」

元々、俺のサークルは生放送のリスナーさんで構成されているため、知っている人もいるだろうけど、報告はきちんとすべきだと思い、自分がV T u b e rになることを話した。

メンバーの反応は至つて普通だった。『まあ、いいんじやない?』といった反応である。

「それでそのV T u b e r活動を小説にして書いてるんだけどこのサークルのことも書いていい? ついでに宣伝すれば来てくれる人もいるかなって」「別に俺は大丈夫だけど」

「こつちも大丈夫でーす」

「あ、こつちも」

すでに俺のV T u b e r活動に参加しているママを除いた全員が領いてくれたのでホツと一安心した。これで俺の活動全てを小説に書くことができる。まだ本を出していないサークルだが、いずれは同人誌を作るつもりなので今のうちに宣伝したかったのだ。

「因みにもしイベントに参加することになつたら顔を隠して参加するわ。アバターのマスク作る」

「え、会場の中だけだよな？ 外でも付けてたら不審者だぞ」

「当たり前でしようが！」

さすがにマスクを被るのは会場だけだ。そんな会話をしながら会議を終えようと次回の開催日を決める。

「じゃあ、次回は……えっと、何回だ？」

そう言いながらディスコードのチャットを確認すると今回の会議が第十四回と書かれていた。

「……ねえ、今思つたんだけどこのサークル、結成して一年経つてるんだけど」

「まあ、そうだな」

「そうですね」

「うん、そうだね」

「……これからもよろしくお願ひします」

そんなグダグダなまま、会議は終了。

これが俺の所属するサークル——『衛星兵』。もし、同人誌を出すことになつたらライ
ブ配信で宣伝することになるだろう。

そして、年が明け、とうとうチャンネルに一つの動画を投稿した。自己紹介動画、の
ようなものである。

また、デビュー配信の日も決まった。2021年1月10日の21時からだ。

だが、それと同時にニコニコ生放送での配信を休止するということでもある。そのため、最終回放送をデビュー配信前日の9日の20時から6時間放送をするつもりだ。

次回はその最終回放送の様子を書くつもりである。これを投稿した時点ではまだ配信していないのでどうなるかわからないが、小説にできるほどの取れ高があることを願うばかりだ。

それでは、皆様、また、次のお話でお会いしましょう。

十一ページ目：生主を休止した日

Youtuberとしてデビューする日が決まった。この先、どうなるかわからないが何かない限り、この先はYoutubeで活動していくつもりだ。そのため、デビューするということはニコ生を休止することもある。

そのため、2021年1月9日20時にニコ生最終回生放送をした。これはその様子を記録したお話である。

「はーい、皆さんこんばん——セイハロー！」

生放送を開始してすぐにいきなり間違えた。最近の生放送では『セイハロー』に慣れるために最初の挨拶として使っていたのだが、毎回の如く、言うのを忘れてしまうのだ。
「これ、絶対『こんほし』の方が言いやすいんだけど……では、改めまして皆さんこんばんは。ホツシーです」

そう言いながら手動で330分延長する。これで生放送時間は6時間。普段から6時間生放送をちよくちよくしてきた身としてはもう慣れた長さ。しかし、今日ばかりは少しだけ不安だつた。

「いやあ、どうどう来ましたね。最終回！　6時間色々やりますが……正直に言いましょう、何も決めてないです」

一応、最後の2時間は歌つて終わるつもりだが、残りの4時間に関しては全くのノープランだったのだ。たかが4時間、されど4時間。普段の放送なら適当にソシヤゲのデイリーなどで時間を消費できるが、さすがに最終回生放送でそれをやるのは憚れる。

「いやね？　本当はやることあつたんですよ？　昨日の生放送でも言つたけど妹様と弾幕ごつこする予定だつたんですけど、何故か開かなくて……」

そう言つて件のゲームが入つてているフォルダを開く。昼間、作業の合間にきちんと起動するか試したのだが、何故か『応答なし』。つまり、起動しなかつたのである。

「あの、もう一回試してみてもいいですか？　もしかしたら妹様の機嫌も治つてるかもしないですし」

そんな言い訳をしながらゲームをダブルクリック。別ウインドウが開き、BGMが流れる。本来であればこのままタイトル画面に変わるのが、一向に変わる気配はない。

心からの叫びで必死にゲームに訴えるが、残念ながらその結果は『応答なし』。どうやら、妹様は俺とは遊びたくないようである。

「……と、いうことでね？ 初つ端から企画倒れなんですよ。なら、もういいかなって」
リスナーさんが多ければ数人で遊べるゲームもネットの世界には存在している。だが、生放送が始まつた直前なので人はほとんどいないため、それもできない。

「……あと360分、何すんだよ、俺！」

最終回なのに全くの無計画。本当に何をやろうか悩んでいたが、もうここまで来たら開き直ることにした。

「じゃあ、もうソシャゲりますか。いつも通りの生放送でいいよね？」
まつてきいたら皆で遊びましょう」

——すなわち、いつもの放送

「そう、いつもの放送。なんかそれも俺らしいかなって……と、いい感じにいつて自分の
計画力のなさをカバーしていく」

そんなことを言いながらソシャゲの画面を映してディリリーを消化し始める。

そして、1時間が過ぎた。その間、ソシャゲしかしていない。本当にいつも通りの放送だつた。しかし、1時間経つ頃には一緒にゲームをしてくれそうなリストナーさんが来てくれたのでソシャゲはここで終わることにする。

「じゃあ、次は——」

さすがにソシャゲ放送だけで終わるのはまずいので来てくれたリストナーさんに声をかけてネットでできるゲームを始めた。

そんな中、様々なボードゲームができるサイトで『Can, t Stop』というゲームをすることになった。

『Can, t Stop』とは2~12までの数字が書かれた1~1列のあるボードがあり、自分のコマをマス目に沿つて進めていき、3つの頂上を取った人が勝ちのゲームだ。なお、コマを進めるためには自分の手番でサイコロを4つ振り、出た目を組み合わせて2つずつペアを作る。その2つのサイコロの合計の数が自分のコマを進めることのできる列だ。

例えばサイコロの出目が1, 2, 3, 4だつた場合、『1と2』、『3と4』のペアに分

けると『3』と『7』になるのでその2つの列にコマを置く、もしくはすでにコマを置いていたら1つ進めることが可能だ。

また、組み合わせによつては『1と3』で『4』、『2と4』で『6』。『1と4』で『5』、『2と3』で『5』と言う感じで組み合わせるサイコロによつて『4』と『6』を1つずつ進めるパターンと『5』を2つ進めるパターンができる。

もちろん、コマを置く数には制限があり、一度の手番にコマを置く、もしくはコマを進める列は3つまで。もし、3つ置いた状態でその3つの列の数字になる組み合わせを出せなかつた場合、バーストとなり、その手番で進めたコマは全て回収され、おじやんとなる、一種のチキンレースもある。更に誰かが頂上を取つた列にはもうコマを置けなくなり、ゲームが進めば進むだけバーストしやすくなるのだ。

そのため、このゲームでは『もう少し進みたい』という欲を振り払い、少しずつコマを進めるのが確実に勝つ方法、なのだが――。

「ほい、ほい、ほい……はい、勝ちました」

——実はこのゲーム、俺はめちゃくちゃ強い。おそらく自他共に認める強さだ。

2つのサイコロを振った時、確率的に最も出やすいのは『7』である。そのため、このゲームでは『7』の列が13個と最もマスが多く、『7』から離れる度にマスが2つずつ少なくなっていく仕様になっている。『6』と『8』なら11であり、『5』と『9』は9。最も少ない『2』と『12』はマスが3つしかないため、3回出せば頂上に辿り着く。

そんな中、最初のゲームで俺は『8』を1回もバーストせずに11回出して頂上に到着。その列を獲得した。

「いやあ、相変わらず、ダイスの女神さまは俺の隣で寝てるわあ」

どういうわけか、俺のダイス運はそこそこ高いようでサイコロを使用するTRPGでもその真価を發揮し、『出目強者』扱いを受けるのもしばしば。自分的にはそこまで良いとは思っていないのだが、そう言つたらその場にいた全員に怒られたことがあった。

1試合目は普通に3つの列を獲得し、勝利を收め、次の試合へと進む。

そして、最後の試合となり、恒例の地獄を始めようとしていた。

「じゃあ、次は最後なので……『1つの手番で3つの頂上が取れるまで止まれません』をやりまーす」

先ほども言つたが、このゲームのセオリーは少しづつコマを進めることである。

だが、この縛りはそれができない、バーストしまくりの地獄の耐久ゲーム。前にも一度だけやつたことがあり、その時は30分ほどで何とか俺が勝利して終わつた。放送時間も余裕があるので1時間もあれば終わるだろうと見越しての提案だつた。幸い、参加していたリスナーさんも『いいよ』と言つてくれたので早速ゲームを始める。

「あ、俺からですね」

そう言いながらダイスを振ると最初に『7と7』の組み合わせが出た。『7』は最も出やすい数字なのでこれは確実に押さえておきたい列だ。迷わず、その列を獲得する。

更にダイスを振ると『6と4』の組み合わせだつた。『6』は『7』の次に出やすく、『4』は出にくいものの、列が少ないので『7』と『6』より優先的に選択すれば頂上を目指せる数字だ。

それからどうせストップしないのでテンポよく、ダイスを振り続ける。コツは3つの列を満遍なく進めること。仮に『7』の頂上に辿り着いてしまつた場合、それ以降は『7』を選べなくなつてしまつてバーストしやすくなつてしまつう。

「はい、はい、はい」

『7』、『6』、『4』と順調にコマを進め——3つの頂上に辿り着いた。

「はい、しゅーりょー！」

まさに瞬殺。ゲーム時間はたつたの3分である。時間を潰すための縛りが全く機能しなかつた。さすがに自分でも予想外の結果である。

草
R T A

「C a n , t S t o p R T A はやばい。いや、今のはすぐくない!?」

——奇跡だし、面白かつたんだけど、
——見てる側は面白かつたけど

俺の言葉に反応したのはゲームに参加していた2人のリスナーさんだつた。まあ、奇

跡だつたとはいえ最後のゲームだつたし、参加している2人からしたら少し不満だつたかもしれない。

——途中で『ホツシーさんなら有り得そうだな』って1発クリア感じた
——まあやるときややる奴だよなあ～って

少し不安に思つたが、どうやら杞憂だつたらしい。むしろ、今までの俺のダイス運を見ていたリスナーさんなので当たり前のように受け入れられていた。

「これはもう小説に書くしかないわあ。取れ高あつてよかつたあ」

こうして、波乱の『C a n , t S t o p』が終了し、1時間ほど遊びに来ていた03と明日のライブ配信の準備しながら雑談をしてとうとう最後の2時間になる。

「では、ここからは歌つていきます。正直、下手くそだけど楽しそうに歌うことに関しては負けません」

そう言いながらどんどん曲を選び、歌う。時々、リスナーさんからのリクエストにも応えつつ、ほぼノンストップで歌いまくつた。結果的に2時間の間に20曲以上も歌い、最後の5分になる。

「……どうどう終わりですね」

そう言いながらカラオケのためにエコーをかけていたので消し、通常通りの設定に戻す。最後の挨拶は特に決めていなかつたが、言葉は自然と出てきた。

「何度も言っていますが、明日の2021年1月10日の21時からデビュー配信をしたいと思います。時間は1時間くらいかな」

——もう6時間経つんですね

「早いですねえ。で、VTuberになるにあたって事実上、ニコ生は休止。今日で最後の放送となります」

本当に色々あつた9年間だつた。様々な話をしたし、ゲームもした。たくさん、とは言えないかもしけないが、色々な人が来てくれたし、常連にまでなつてくれた。

「でも、やっぱり、VTuber活動をし始めてすごく思ったのが、9年間生放送をしていなければVTuberになろうとは思いませんでした」

特にアバターを作ってくれたママ。ライブ配信の背景を描いてくれたリスナーさん。

また、MONEY CRAF用のスキンを作ってくれたりスナーさんもいた。

「もちろん、VTuber活動を手伝ってくれた人だけじゃないです。ずっと遊びにきてくれている常連さんも、相方になつてくれた03も、俺がニコ生をしてなければ出

会っていません

話しながらこれまでのことやこれからのが脳裏を過ぎる。本当にV T u b e rとしてやつていけるのか、どんな結果になるのか。もしかしたら、配信そのものを辞めてしまう日がくるかもしれない。

「でもね、はつきり言わせてください……どうせ、バズらねえ！」

ああ、そうだ。活動場所を変えただけでバズるのなら俺よりも先にV T u b e rになつた先駆者たちはもつと活躍しているだろう。そんな甘い世界ではないことぐらい最初から知つていた。

——草

「9年間やつてきてコミュニティーの人数400人だよ！ そんな奴がV T u b e rとなつて、相方を手に入れて、『さあ、バズろうか』なんてできるわけがない！」

前、V T u b e rになると言つた時、リスナーさんの一人が俺の放送が変わつてしまふとコメントしたことがあつた。それがずっと気がかりだつたのである。

でも、活動場所を変えただけでバズらないのと同じように9年間も続けてきた雰囲気がそう簡単に変わるわけがなかつた。

「だから、また来て。『またやつてるよ、ホツシー』、『あんなにV T u b e rになるつてイキつてたのに誰もいねえじやねえか！』と。そう言つて俺を支えてください。そう簡単に変わらないからさ」

一番悲しいことは『あいつ、変わったな』と思われることだつた。ずっと前に『ホツシーさんの放送はほのぼのしててずつと聞いていられる』と言われたことがある。その言葉を聞いて初めて俺の配信でも誰かに影響を与えるのかもしれないと思つた。
 「もし、万が一にもバズつたらさ。『おいおい、知つてるか？ あいつ、コミュ人数400人しかいなかつたクソザコ生主だつたんだぞ』と初期勢面してくださいよ」

そんな雰囲気を壊したくない。だから、ずっと遊びに来てくれた常連さんの協力が必要だと思つた。

「初期勢だと言えるのはきつとここに遊びに来てくれているあなたたちです。これからも仲良くしましよう。また、遊びに来てね。『お、また来たのか。こんなクソみたいなライブ配信に来て』って言わせてください」

残り時間が1分を切つた。もう終わる。9年間続けていたものが終わりを迎える。
 それは、初めての経験だつた。

「最後に、放送タグを見てください」

俺のニコ生タグはどんな放送でも必ず付けているタグが3つある。

1つは『雑談』。

2つ目は前に話した『自由奔放生放送』。
最後は——。

——『いつまでもあなたを待つ程度の能力』

それはずっと昔、俺が生放送を始めた頃に『待つことが苦ではない』と話した時にリスナーさんから貰った能力名だった。能力、というと中二病臭いけれど、俺はこのタグが気に入っていた。

「この能力がある限り、俺はいつまでもあなたたちをお待ちしております。活動場所は

変わりますが、変わらずわいわいがやがやとやっていますので応援よろしくお願ひします」

残り30秒を切った。そろそろ締めの挨拶をしなければならない。

「では、最後はこの挨拶で締めましょうか。明日、俺は星になるからさ。あの——」

——この放送は終了しました。

ラグのことを忘れており、締めの挨拶すらできずに放送が終了する。まあ、それも俺らしいと笑えた。

こうして、9年にも及ぶ生主活動は終わりを迎える——次のステージへと進む。
さあ、2021年1月10日、俺はどうとうV T u b e rとしてデビューする。

それがどのようなスタートになるか、それは俺すらもわからない。今回と同じようにこうやつて小説に書けるほどの取れ高があることを祈るばかりである。

それでは、皆様、また、次のお話でお会いしましょう。

十二ページ目：デビューした日

2021年1月10日、『俺のV T u b e r活動日誌』を投稿して約1か月。どうとう、この日を迎えた。

「03、そろそろ始まるけど大丈夫」

「大丈夫でーす」

時刻は20時50分を過ぎ、すでに待機画面ではそれなりに苦労して作つたミニアニメ的な動画が流れている。『N o w L o a d i n g』という文字が時間差で回転し、アバターの設定が宇宙人なのでロケットや惑星、流れ星が一定の速度で動くアニメーションだ。

「じゃあ、始めます」

他に準備のし忘れないか確認していると21時になつたのでミュートを外してすぐ画面を待機動画から配信画面へと切り替える。O B Sの画面が変わつたのを確認して話すために空氣を吸つた。

「はい、皆さん、セイハローー！ 初めまして、ホツシーと申します」

2021年1月10日の21時、俺はV T u b e rデビューを果たした。

——ヤツホツシーセイハロー
——セイハロー
——ヤツホツシー

「あ、よかつた。一番不安だつたチャットも画面に出てますね」

アバターや画面上に表示されている文字は放送前から確認できるが、チャット欄だけは実際にチャットを打つてもらわないとちゃんと設定できたかわからなかつたのできちんと表示されてホツと一安心だつた。

「でもね、ヤツホツシーを流行らせようとしないでください。セイハローですよ?」

ニコ生のリスナーさんたちがいつものようにいじつてくるので笑いながらツッコむ。やはり、V T u b e rになつても常連さんとの関係は変わらないようだ。

「それでは、改めましてホツシーと申します。今日から執筆系V T u b e rとして活動することになりました」

それから数人の人が挨拶してくれたので名前を呼んで挨拶する。とりあえず、デビューパンくわく配信来場者0人は免れた。さすがに0人だつたら心が折れてしまいそうである。「実はですね、自己紹介動画を見ててくれた方はわかると思うんですけど私、宇宙船『キ

キヨウ』に乗ってる者なんですが色々あります……気づけばこんな体になつてしまつたんです」

『そう言いながら表情を動かすとアバターも同じようにそれを変える。トラッキングも上手くいっているようだ。』

『その時に動画に出てきた03に『お前、V T u b e rになれよ』って言われて……実は自分もあまり事情を知らないんですね』

それから03が登場するタイミングを図るためにアバターを動かしながら前振りを行う。あらかじめ03には特定の言葉を言つたら入つてきてもうようにお願いしているが、上手くいくだろうか。

『デビュー配信中に説明するつて言つてたんですけど……来ねえな。『エネルギーが足りないから寝るわ』って言つててここ1か月くらい話してないんですよね。あれ、全然来ないな』

「……ふわあ。よく寝たあ」

「あ、03、おはようございます」

「おはようございます」

欠伸をしながら登場した彼女に声をかけると向こうも返してきた。入るタイミングがズレてグダるようなことがなくてよかつた。

「では、ここで音量調節しますね。私と〇三とBGMの音量は大丈夫ですか？」

——きこえてまつせ

——きこえるやで

——聞こえますー

——問題なく聞こえるね

「まだ眠いわあ」

「まだ眠い？ もうちよつと頑張つて。あと1時間やるつもりだから」

「ねえ、寝ていい？」

「寝ちゃダメですよ！ 事情を説明してください！」

〇三の設定は宇宙船『キキヨウ』に搭載されているAI、としか決めておらず、彼女の言動は彼女自身に決めてもらつたのだが、ダルダル系で行くらしい。

それからアバターの話や宇宙船が墜落した原因、チャンネル登録数が増えると元の体に戻ることができるという設定を〇三と話しながら説明していく。話す内容だけ軽く話しただけで台本など全く用意していなかつたが、さすが7年も付き合いのある相棒だ。詰まることなくするすると話が進んでいく。

「あれ、でもさ、チャンネル登録数が増えればエネルギーも増えるってのはわかつたんだけど、どれくらい増えたらどんなことが起きる、とかわかつてないの？」

「だいたいですね1000人くらい集まればこの03が具現化します」

「具現化!? え、なに？ 俺の体を取り戻す前に君の体を作らなきやならないの!?」

「だつて、あなた、なんの可愛さもない星ですよ？ ただの星に人が集まると思いません

？」

「……スウ」

まあ、確かにこんな星に人が集まつてくるとは思えない。自分で指定したアバターだが、それは自分自身でも自覚していることだった。

——何の可愛さもないwww

——何の可愛さもない……で顔がスン……つてなつたのくさ

「だから、私が一肌脱ごうということですよ」

「わかった、まずは君の体を手に入れることを目標に頑張ろう。えつと何？ 人？ ふざけてんのか、大変だろ。ああ、俺の体はいつ取り戻せんだよ！」

「まあ、がんばつてもろて」

1000

「いや、頑張るけどさ……頑張ります」

なんとか設定のくだりを終え、次に挨拶やタグについて説明していく。内容に関しては小説の方で書いているので割愛するが、タグが変わったものがあった。「次はファンアートですねー。これは私が考えました……それがこちら、『Starwritete』！」

——#Starwritete☆彌

タグの説明をしている途中でチャットが流れた。俺が考えたタグに☆彌が付いていた。

「あー、その流れ星は弾かれちゃいそうですけど……いいですね。欲しいな」「文字だけより、記号ついていた方がいいんちゃいます？」

「じゃあ、貰いましょう」

ファンアートのタグをその場で変更し、『#Starwritete☆彌』になつた。

なお、デビューアイコンの次の日、Twitterで『☆彌』をタグとして使用できることがわかり、どうするか頭を抱える羽目になるのだが、この時の俺たちはそんなことを知る由もなく、意気揚々とタグの説明に戻つた。

「じゃあ、これが最後ですかね。ファンタグです。『プラネットメイト』です。このメイトはクラスメイトとか、ソウルメイトのメイトで——」

——交信者でええんちゃう

「……はつ！ それは、いいな」

配信タグの『キキョウより交信中』にもかかっているし、なによりわかりやすい。『プラネットメイト』も苦し紛れに決めたものだつたのであまり納得していなかつたのだ。

「03、どう思う？」

「ええんちゃいます？」

「適當だな……じゃあ、ファンタグは『交信者』に決定です」

その後は突発的にファンマークについて話し合い、アンテナの絵文字の横に☆を置くように決まつた。星からの電波を受信しているアンテナというイメージだ。

「では、続きまして……色々説明することがありまして——」

それから自分の活動内容を説明していく。特に『俺のVTube r活動日誌』に関してもライブ配信の様子や実際に打たれたチャットが小説に登場することを話した。

そして、あつという間に1時間が経ち、配信終了の時が近づいてきた。

「では、小説の評価もよろしくお願ひします！　この後、22時30分からの『M〇N E C R A F T配信』にも遊びに来てくださいね！」

そう言いながら配信を終える準備を進める。配信の切り忘れだけは絶対にしてはならないので慎重に動作を確認した。

「じゃあ、一発目のあの挨拶をしましようか……それでは、みなさん、以上、交信終了！お疲れさまでしたー！」

「じゃねー」

こうして、V T u b e r デビューパートはなんとか無事に終えることができた。

次回はこの後すぐに行われた『M〇N E C R A F T配信』について語ろうと思う。な

お、遊びに来てくれた交信者たちを阿鼻叫喚させた回だった、ことだけは言つておこう

それでは、皆様、また、次のお話でお会いしましょう。

十三ページ目：初M〇NEクラ配信した日 前編

「はーい、みなさーん、セイハロー。ホッシーです」

無事にデビューアルバム配信を終えた俺と03だったが、その配信で言つたようにすぐにM〇NE CRAFT配信を始める。

なお、デビューアルバム配信が終わつたのは22時を少し過ぎたぐらいだったが、22時半までにM〇NE CRAFT用のサムネを急いで作つてなんとかギリギリ間に合つた。

「あ、ほら挨拶して挨拶」

「03でーす」

「ざつづ！」

もちろん、デビューアルバム配信から続けて配信しているので03も参加している。M〇NE CRAFT配信は03とマルチプレイでやる予定だったので初M〇NE CRAFT配信の時は絶対にいて欲しかつたのだ。

——セイハロー
——セイハロー

——セイハロー——

配信が始まつた直後からデビュー配信に遊びにきてくれた視聴者さんたちが挨拶をしてくれる。きちんと挨拶も定着してくれたようで一安心。

「ほら、もうちょっとさ。03だよーぐらい言つてもいいんじやない？」

「03だよー！」

「そう！ それだよ！」

「……このテンション続かないからもうやめるね」

「いいよ」

03はダウナー系のキャラ——というより、それが素なので無理してキャラ付けしても長続きしないことはわかつていた。なので、すぐに領いて進行に戻る。

「みなさん、いらっしゃいませー」

——セイハ……こんほしく

「こんほしつて言うのは止めるんじやあ」

来てくれた視聴者さんに挨拶しているとニコ生時代の常連さんが悪ノリを始める。

ここでこれを無視すれば『こんほし』が定着してしまうのでツッコミを入れた。

その後、音量調節もすぐに終わらせ、MONECRAFT配信の本題へと入る。

「それじゃ、やつていきましょう。03も入つていいよ」

「はーい」

そう言いながらMONECRAFTへとログインするが、なかなか入れない。アバターがアバターなので配信画面に出さずに待つ。

「お、入れ……痛い痛い痛い！」

「ちよつ……あつはつはつは！」

ログインしたと思った矢先、03から素手でボコボコと殴られるが、途中で俺のアバターに気付いたのだろう。殴るのを止めて爆笑し始めた。まあ、うん、その気持ちはわかる。このデザインを頼んだのは俺だが、出オチ感は否めない。

——スキンコワツ……

——星ですらなくなつたw

——星ですらねえじやねえか……

——スキンほぼ真っ黄色で草

「あの、誰ですか？」

「ども。いたつ、殴らないで」

「ちょっと寄らないでもろて」

「なんかこのゲームに適した体になると聞いたのでちょっと見てみ——」

バスバスと殴られて着実に体力が減っていく中、アバターを見せる。そこには全身黃色いタイツ。そして、胸のところにポツンと顔があるアバターだつた。

「——え？」

もちろん、デザインは知つていたが、実際に動かしてみるとそのキモさが際立つ。これは、うん、キモイ。それに今更気づいたが、このアバターの状態で胴装備を付けると胸の顔が隠れるため、自然と縛りプレイが確定した瞬間だつた。

「これはあれか？ 手と足がこの体の左右と下の星の頂点で頭の部分が上の頂点か？」
「くつくつく……」

俺がアバターの説明をしている間も03は笑い続けていた。正直な話、このアバターができるまでデフォルトのアバターを使おうと思っていたのだ。それだけ星アバターをM〇N E C R A F Tのスキンにするのが難しかつたのである。このスキンを作つてくれたとある常連さんには感謝してもし切れない。

「あ……ホツシー」

アバターにツツコんでいると〇三が何かに気付いたようで俺を呼んだ。何だろうと思いつながらも配信上のチャット欄を調整する。

「ん？」

「船の残骸があつたよ」

「え？ 船の残骸？」

MONECRIFT自体は経験したことはあるが、何年も離れていた上、ずっとブランチマイニングしかしていなかつたので『船の残骸』というワードに心当たりがなかつた。

「え、どこ？」

「こっち」

「うわ、なにこれ」

〇三のところへ移動するとそこには地面から半分だけ出ている船の残骸があつた。まさか初期リスボーン地点の目と鼻の先にあるとは思わず、驚いてしまう。

——地上にあるの珍しいな w
——宝箱あるぞ

「宝箱ある？」

「あるよー」

「あ、眼鏡かけていい？」

「03 眼鏡かけるのか！」

「眼鏡属性付けていこうかと」

ツツコミながら『君はA-Iなんだからもう少し設定を大事にして……』と心の中で思つてしまふ。まあ、その点に関しては最初から諦めていたことなのですが、いかと完結させ、船の解体作業を続ける。

——最初の木の取り方が特殊すぎるw

——こんな初手木こりがあつただろうか……

チヤツトでツツコまれながらも作業を続けるが、夜になつてしまい、真っ暗な画面の状態だ。配信的には大変よろしくない状態なので早く朝になつて欲しい。

「あ、ホツシーはーん」

「はーい」

「こつちきてー」

「はいはーい……って、やべ」

03に呼ばれた直後に壊したブロックの先から水が流れ込んでくる。残骸の近くに海があつたのでそれが原因だろう。とりあえず塞いで03のところへ向かつた。

「ほら、開けて」

どうやら、03は船の残骸に隠されていたチエストを発見したらしい。少し前に鉄のインゴットも手に入れていたようなのでこれで2個目のチエストだ。

「おお、めっちゃ入ってる」

そこには小麦やジャガイモ、ニンジンはもちろん、紙——そして、竹が入っていた。序盤でジャガイモとニンジンが手に入つたため、食糧問題が解決したのも同然である。

——宝の地図はここには無いか……

——入れ直したな？

——は？ 最初から竹とか w 運良すぎかよ w

「竹つて運いいの？」

「すごいいい方」

「やっぱ、これがホツシーの運なんだよなあ」

「え、本当に？」

今までそこそこ運が良かつたので正直、そこまで驚くことではなかつたが V T u b e r としては美味しかつたのでこれ見よがしにイキる。本音のところ、竹自体、初めて見たのでその価値がどれほど高い物なのかよくわかつていなかつた。

——竹はジャングルにしか生えてません

「へえ、そなうなんだ。でも、宝の地図はなさそなうだね」

「まあ、チエストは運が良ければもう一個あるから」

それから再び、残骸の解体作業を続ける。途中、ゾンビに襲われ、間違えて作ったクワで倒したり、小麦をパンに変えて食べたりしていると 03 が不意に声をあげた。

「あれ……あそこにあるの、メサじやない？」

「メサ？ メサつて何？」

「なんか小さ目のメサっぽい」

03 がいるところへ向かうと彼女は海の方を見ていた。確かに少し離れたところに見覚えのない茶色っぽい土地がある。あれがメサ、というものなのだろうか。
「ちょっと泳いで見てくる？」

「見てくる？」

そうと決まれば〇三と一緒に海へ潜り、見知らぬ土地へと向かう。途中、熱帯魚や昆布を眺めながら少し泳ぐとメサ特有の高い土地が見えた。

——は？　おめえまじで運良すぎか？

——まじかよ

——何このシード……

「あ、やっぱメサだ」

「おー、メサだー……メサつて何？」

「金鉱石とか廃坑が多いとこ」

「へえ」

チヤツト欄がざわざわしていることには気づいているが、やはりメサの貴重さを知らないため、『そんなに騒ぐことなのか？』と首を傾げながら〇三にメサについて教えてもらう。

「とりあえず、沈没船の解体進めますか」

メサを少しだけ探索し、すぐに初期ボーン地点へ戻る。その途中でイルカを発見

し、テンションが上がっていると窒息ダメージで再び瀕死になつてしまふ。急いでパンを作つて食べて体力を回復する。

「あ、視点主、こつち来て」

「ん？」

作業を続けているとまた03に呼ばれ、そこへ行くと最後のチエストがあつた。さすがに今更勿体ぶるのも変なのですぐに開ける。

「あ、宝の地図」

03の話では半分以上地面に埋まつていたのでない可能性もあつたが、しつかりと宝の地図も入手することができた。

「いやあ、いいですね……あれ、03どこ？ 探索？」

「うん……あ、村だ」

「え、マジで行つてる？」

「しかも、ゴーレムもいる」

「結構でかい村だね」

数分前に03を見かけたので彼女が探索に出かけたのはほんの少し前。つまり、すぐ

近くに村があるのだろう。

初期スポーン近くに地面に埋まつた沈没船。

海の向こうにはメサ。

そして、メサの反対側に行けば大きな村。

なにより恐ろしいことが——ここまで配信を始めてから30分も経っていないこと。M〇N E C R A F T配信を始める前は小説に書ける程度には取れ高があるといいな、と思っていたがこれほどまでに濃縮された初M〇N E C R A F T配信はあるだろうか。

しかし、まだ怒濤の取れ高ラツシユは終わらない。あまりにも要素が多くすぎるため、続^きは次回、大きな村探索から書こうと思う。

それでは、皆様、また、次のお話でお会いしましょう。

十四ページ目：初マ○クラ配信した日 後編

「あつた」

03に呼ばれ、歩くこと数十秒。予想以上に近いところに村があつた。村はエメラルドがあれば交渉してアイテムと交換できるし、序盤で見つけられたら色々な資材をパクることも可能。始めて30分も経つていい俺たちからしてみればまさに宝の山である。

「この村、畑もありますぜ」

「やつた、勝つた」

「これは勝つたな、風呂入つてくるわ」

そう言いながら俺も村へ突入。数人の村人を見ながら周囲を見渡すと03の言うとおり、かなり大きな村だつた。

「ホント、取れ高やばいな。本当なら何パートにも分かれてやる内容がぎゅっと凝縮されてる」

「わいとホツシーの運が組み合わさってわけわからん」とに……
「あ、ゴーレムさんだ」

それから村の中を探索したが、スイカや俵、白紙の地図、なによりベッドなどを手に入れることができた。まだ鉱石を手に入れていないので白紙の地図はありがたい。

「砂漠だ」

村を探索している間に村の奥が砂漠になつていてことに気付き、そのまま俺一人で様子を見てくることになった。装備は整っていないがベッドで朝にしたばかりなので敵M O Bはほぼ皆無。軽く見てくるだけなら特に警戒する必要もないだろう。

「砂漠って目ぼしいものあつたっけ？」

「ピラミッドくらいかな」

しかし、ぐるつと見て回つたがあまり大きくない砂漠だつたため、すぐに探索は終わりにして村へと戻る。そのまま白紙の地図が入つていたチエストを開け、インベントリーヘと入れた。

「そこ」に製図台があるから拡張してもらおう

「お、おう」

ホツシー、初めての製図台による地図の拡張。前は作業台で地図の周りを紙で囲えば大きくすることができますが、今は製図台がないときないらしい。

それから視聴者に使い方を教わりながら最大まで拡張。どうやら、初期スポーン地点は地図と地図の境目に近いところだつたらしく、村で地図を使つたため、初期スポーン

地点は同じ地図上にはなかつた。

「とりあえず、村人は閉じ込めておくか」

この村を拠点にするつもりはなかつたが、交渉する可能性もあるため、ゾンビに殺されないように家に村人を閉じ込めていく。

——この人でなし！　あつヒトデだつたわ

——このヒトデなし！

その光景を見た視聴者が俺のことを『ヒトデなし』と呼び始める。俺のアバターが星なのでそれにかけた罵倒だつた。

「ヒトデ言うなし

「監禁するなんてサイテー！」

「このヒトデなし！」

そんな会話をしながら村を後にし、初期スポーン地点へ戻つてきた。夜になつていたのですぐにベッドを設置し、眠る。

「じゃあ、ここにチエスト（村からパクつてきた）を置くからここに入れていこう

このままインベントリーがいっぱいだと資材を見つけてきても持つて帰つて来られ

ないため、一度整理することにする。

「あ、俺、宝を探してくるわ」

初期スローン地点近くにあつた沈没船で見つけた宝の地図をずっと放置していたので試しに探しにいくことにした。石の剣とツルハシ、スイカを持って地図を頼りに冒険へと向かう。方向的には先ほどの村があつた方らしいが宝の地図は初めて触れるのでイマイチ仕様はわかつていなかつた。

そして、これが長い冒険の始まりだつた。

村の奥の砂漠へ移動し、その先が海だったのでボードを作成。そのまま単身でボートに乗り込み、大海原へ突入。

——本当に方角合つてる?

「え？」

視聴者の指摘にF3を使って方角を確認。全く逆だったことがわかり、慌てて踵を返して改めて初期スポーン地点付近から大海原へ。

だが、ボードで進んでも進んでも一向に宝の地図には何も変化がない。F3で方角を確かめ、ひたすら北西へと向かう。

冒險を始めて40分ほど経った頃、ずっと北西に向かつて歩いていたが何故か宝の地図には変化がない。03の話では近くにあると言っていたのにここまで変化がないと不安になってしまった。

——サーバーに入り直してみたら？

「サーバー？ あ、もしかしてバグ！？」

その時、視聴者の一人がそんなチャットを打つた。宝の地図に触れたことがないと言つてもここまで変化がないのはおかしいと思つていたのだ。すぐにサーバーから抜け、入り直してみる。

そして、アバターの左手にあつた地図は綺麗な青色に染まつていた。

「バグだつた……戻ります」

バグにより地図に変化が出なくなつていたようで完全に宝の場所を通り過ぎていたのである。しかも、宝の地図にはメサっぽい茶色い土地も見えるので初期スポーン地点から目と鼻の先にあるようだ。そして、現在、自分がいるのは初期スポーン地点から40分ほどほぼノンストップで北西へ進んだ場所。

——バグだつたあ w

——バグかあ

——うわあ……

半分泣きそうになりながらも初期スポーン地点に向かつて走り出す。イベント盛りだくさんで最後の最後にバグ。

「あ、これ俺、小説書かなきやならないのか……死にそう」

「頑張つてねえ」

本当ならもう少し穏やかな配信になると思つていたのでこの先に待ち受ける執筆作業に絶望する。イベントが起きるということはそのイベントに纏わる情報はもちろん、その時の俺の心情、視聴者のチャット、03の反応などをアーカイブを見ながら何度も巻き戻して確認しなくてはならない。考えるだけで面倒臭い作業であることは一目瞭

然である。

なお、俺が戻っている間、03は最大まで拡張した地図を埋めていた。バグのせいで時間を無駄にした俺よりも仕事をしている。

それから20分ほど経つた頃、夜になつたのでそろそろ寝ようとした時だつた。地面にマグマブロックがちらほらと埋まつているところを見つける

「……あ、これネザー跡地か」

これはSwitch版のM〇N E C R A F Tで見たことがあつたので知つていた。黒曜石とマグマブロック、そしてチエストがぽつんと置いてある場所である。とりあえず、ベッドで寝て朝にしてからネザー跡地の調査へ向かう。

チエストを開けると金インゴットや火打石、エンチャントされた金のクワとツルハシやファイヤーチャージ。そして、金のリングが入つていた。

他に目ぼしいものはなかつたのでマグマブロックを数個だけ取つてそのままネザーストーン地から離れる。だが、歩き始めて数分後、今度は村を見つけた。本日、2つ目の村である。

さすがに無視するわけにもいかず、村で資源集めを始めた。今度は燐製器を見つけ、ツルハシで回収しておく。それ以外は儀を大量に回収しただけだ。

「……あれ、メサだ」

村を後にしてすぐ。今度はメサを見つけた。初期スローン地点付近のメサだろう。
しかも、海の上から見て大量の蜘蛛の巣があつたので念のために近寄らずに帰り道を急
ぐ。

「あ、ジャングル来ちゃった」

「え、どこ？ 近い？」

「いや、近くはない」

「きちゃや？」

「きちゃやー！」

——ふああああああああ!?

だが、その直後、地図埋めをしていた03がジャングルを見つけてしまう。あとで
知つたのだが、ジャングルはレアバイオームらしい。俺はそこまで珍しいとは思つてい
なかつたのでどうしてそんなに騒ぐのかイマイチ理解していなかつた。

「あれ、これ、違うメサだぞ!」

そして、俺は俺で最初に見つけたメサではないメサを見つけていたらしい。初期ス
ローン地点付近のメサよりもあまりにも大規模だつたのだ。大規模すぎて登つて超え

るのが大変なほど大きい。

「……え、待つて。メサ超えた先にもメサあんだけど！」

「こつちのジャングルも大きいからオウムとかパンダいるかも」
更に山を越えた先も同じような山がいくつも連なっていた。03も03で広いジャングルを引き当てたらしい。

「ひえ……ん？ あれ、ネザー跡地あつた」

——メサにネザー跡地！？

そこへ怒濤のイベントラッショ。メサにネザー跡地が突き刺さっていた。もはや笑うしかなかつた。メサとネザー跡地の夢のコラボレーションである。

ネザー跡地には特に紹介するべき資材はなかつたのでチエストの中身だけ回収して終了。そのままメサを超えるために何度も山を登る。

「これ、もしかして俺たちが最初に見つけたのって一部だつたのかな？」

「そうなの？」

「うん、宝の地図も少し埋まつてきたから」

チラツとしか見なかつたのでわからなかつたが、上陸したメサの山の向こうにもまだ

メサは続いていたらしい。

それからやっと初期スローン地点付近へ帰つて来た俺はすぐに宝の地図が示す赤×の地点へ到着する。早速、近くの地上でスコップを作つて掘り始めた。だが、掘つても掘つても出てこない。本当にここに埋まっているのかと疑つてしまふほど出てこなかつた。

「ツ……あつた、見つけた」

掘り始めて50分弱ほど経つた頃、やつとチエストを発見する。正直、もう見つからないと思っていたのでホツと安堵のため息を吐く。

チエストの上にあつた砂を取り除き、開けるとそこには見覚えのない青い球体のアイテムとダイヤモンドなどの鉱石などが入つていた。青い球体は『海洋の心』というアイテムのようだ。

——宝の地図を持つてから約2時間10分

視聴者のチャットを見て苦笑を浮かべる。本当に長い戦いだった。特に最後の掘り作業は苦痛でしかなく、何度も止めようと思つたほどである。

チエストの中身を全て持ち、初期スローン地点へと帰還。荷物がいっぱいなので何往

復かしなくてはならないが作業が終わつたため、初期スローン地点が見えてきて心底安心してしまう。しかも、03が俺のいない間に即席の家を作つていてくれたので仮拠点も完成し、少しずつではあるがゲームが進んでいるという実感を得ることができた。

「じゃあ、そろそろやめますか？」

「あ、ちょっと待つてー」

「はいはーい」

宝探しも終わつたのでそろそろ配信を切ろうとしたが、03がまだ何かの作業をしているようで今後の配信の予定ややりたいことを話しながら時間を潰す。

「——と、いうことでこれから1週間は連続でやりますが、それが終わつた後は週に3回のペースで配信していきます」

「あ、宝、見つけたあ！」

「え？」

どうやら、地図を埋めている最中に沈没船を見つけたようで03も宝探しをしていたらしい。それから彼女が帰つてくるのを待つことにする。

「じゃあ、このチエストに成果を入れて

「全体の成果入れちゃうね」

03がチエストに成果を入れた後、入れ替わるように中身を確認。そこには宝探しで

見つけた『海洋の心』を始めとして色々なアイテムが入っていた。もちろん、03が半分ほど埋めた地図もそこにある。

——一日で海洋の心二つはやばすぎるんだよなあw

「ホントやばすぎるんだよなあ」

『海洋の心』だけでなく、今回の配信では本当に色々なことがあった。ありすぎた。ぜひとも次回以降はもう少し落ち着いた配信がしたいところである。

「と、いうことで……今日から、というか昨日からか。V T u b e rとして活動していくことになりました。色々な企画も考えているのでチャンネル登録、あとT w i t t e r のフォローよろしくお願ひします。それでは今日はこの辺で失礼したいと思います。以上、交信終了！　お疲れさまでしたー！」

こうして、初M〇N E C R A F T配信が終了した。取れ高だらけの濃密な配信だったが、視聴者と交流も持てた充実した時間だつたのは間違いない。

前編と後編に分かれた今回のお話もここまで。次回は——というか、次回もM○N E C R A F T 2日目のお話をしようと思う。さすがに取れ高は今回ほどないが、俺にとつて切つても切れない大切な施設の建造をしたので紹介するつもりだ。

それでは、皆様、また、次のお話でお会いしましょう。

十五ページ目：ヨツトをやつた日

「はーい、皆さん、セイハローー！ ホツシーです！」

デビューアプリから数日ほど経ち、いつもの時間に配信を始める。デビューして初めの1週間は毎日配信しようと決めていたが、今のところ順調に配信を続けられていた。

「では、今日はこちら、世界のア○ビ大全5-1をプレイしたいと思います」

配信画面にゲームのタイトルを乗せながら今日やるゲームを紹介する。

『世界のア○ビ大全5-1』はその名の通り、世界各国のボードゲームなどが5-1種類も収録されているソフトだ。普段の配信では一タイトルを数時間連続で行うことが常であり、内容次第ではプレイそのものが飽きてしまうこともある。

しかし、このソフトは様々なゲームが一つのソフトに集約されているので長時間続けていても飽きず、リストナーさんが増えたらフレンドコードさえ交換すれば一緒にプレイすることも可能。

「実は俺、これめっちゃくちゃやりたかつたゲームで、たまたま今日買うタイミングがあつて買つてきました」

なにより、絶対にやろうと思っていたゲームの一つだったんで楽しみで仕方なかつ

た。その理由はいくつかあるが、やはり51種類のゲームの中でどうしてもやりたかったゲームがあつたからだろう。

「じゃあ、さつそくやっていきましょうか」

そう言いながらゲームを始める。買ったばかりでチュートリアルさえ終わらせていないかつたため、ポチポチとボタンを押して進めていく。

——セイホシー

「セイハロー、いらっしゃーい。セイホシーじゃないです、セイハローですよ」

数日も配信していればリスナーさんも俺の弄り方を理解し始めたのだろう。いつものように適当に挨拶を訂正する。その後もまともに『セイハロー』と素直に挨拶してくれるリスナーさんは極僅かであり、きっと今後もこんな感じで配信するのだろうともう諦めていた。

「あ、ヨット。これ、すぐやりたかつたんですよ」

チュートリアルも終わり、早速一番やりたかつたゲーム、『ヨット』をプレイする。

ヨットは5つのサイコロを使つたポーカー遊びだ。サイコロの出目で複数の役を作り、その合計点を競う。いたつてシンプルなゲームである。

役は全部で12種類あり、単純に1～6の出目を数える『エース』、『デュース』、『トレイ』、『フォー』、『ファイブ』、『シックス』。そして、同じ出目が4つ揃う、『フォーダイス』。2個と3個の同じ出目の組み合わせ、『フルハウス』。4つの連続の数字、『S.ストレート』。5つの連続の数字、『B.ストレート』。同じ出目が5つ揃う、『ヨット』。最後にフリー枠の『チヨイス』。

上記の12種類の役を揃え、その出目や役に割り振られた得点を合計し、最終的に合計得点が高かつた方の勝ちだ。

因みに『エース』から『シックス』、『フォーダイス』、『フルハウス』、『チヨイス』は出目の合計数。『S.ストレート』は15点。『B.ストレート』は30点。『ヨット』は50点。

更に『エース』から『シックス』の合計得点が63点を超えるとボーナスとしてプラス35点獲得できる。63点を超えるためには3つ以上の出目を出すのが条件であり、逆説的に言えば『エース』から『シックス』まで全て3つ出せば63点になるということでもある。

因みに5つのサイコロは3回まで振り直すことができ、1回目と2回目で出たサイコロの出目をキープすることも可能なため、どの役を狙うか、サイコロをキープするかと単純ながらも考えさせられるゲームだ。

「よし、早速やりましょう」

『世界のア○ビ大全5-1』の中で最もやりたかつたゲームだったので意気揚々とゲームを始める。やはり、ダイス運がいいと言われ続けていたため、『ヨット』でもそのダイス運が猛威を振るうのか気になっていたのだ。

「まずは1投目」

まあ、ダイス運がいいと言つても自分的にはそこまでのものではないと思つているので散々な結果になつた後に『いやあ、やっぱ現実は厳しいですね』と言おう。そう思いながらサイコロを振るつた。

3、5、5、5、5。綺麗な5の『フォーダイス』が出た。

「はあ!? やばくない!？」

初めての『ヨット』の1投目で5の『フォーダイス』を出してしまい、思わず声を荒げてしまふ。しかもあと2回振り直すことができるため、もう一回5を出せば『ヨット』になる。4つの5をキープして振り直したが、残念ながら3のまま変わらず、『ファーダイス』として『23点』を獲得した。

——いつも通り運がおかしい
——お？ダイス運詐欺か??

リスナーさんもさすがに反応せずにいられなかつたようだ。自分でも驚いてしまつたが、ここまで来ると本当に俺はダイス運がいいのかもしれない。

気を取り直してプレイを続けるが、やはり初めてだつたので勝手がわからず、何となく2回目は『23点』のチョイスを埋め、第3投目。

「お、『フルハウス』

6が3つ、5が2つの『フルハウス』が出て『28点』。かなり高得点の『フルハウス』だつたので意氣揚々と埋める。

——完全にフルハウス

「それは完全にラ○ライブ」

コメントに反応しながらさらつと第4投を終え、そのまま第5投目。操作ミスはあつたものの、何とか2、3、4、5の『S・ストレート』を出すことができた。それに加え、あと1回振り直しができるため、1と6を出せば『B・ストレート』を狙える盤面

だ。

「6出ろ……ナイスう

余つていた2を筒に入れ、ポイッとサイコロを振ると自分の声が聞こえていたように6が出て綺麗な『B・ストレート』の完成。『30点』を獲得した。

——音声認識つよい

——今のはつよい

——やつぱこのヒトデ目がやばいよ……

「やつぱ音声認識、強いよね。あ、3出ろ……出ました」

続く第6投目。3、4、5、6の『S・ストレート』を決め、『15点』を得ることができた。

しかし、やはり最初の『ヨット』ということもあり、『フォーダイス』などの役はまだしも『エース』や『デュース』関連のサイコロの取り方を知らず、『シックス』で『24点』を取つたぐらいであまり得点は伸びず、『165点』で終了。それでも全体的に出目はよかつたのは間違いないなかつた。

「いやあ、楽しかつたですね」

そう言いながら『ヨツト』を終え、他のゲームへと移動する。それから他のゲームをしたり、もう一回『ヨツト』を遊んだり、リスナーさんと『ヨツト』をしたりと大いに『世界のア○ビ大全51』を楽しんだ。

次回は執筆系V T u b e rとして即興短編小説を書く配信の様子を書くつもりである。しかし、今回と同様、もしかしたらお題が変わるかもしれないのは許して欲しい。

それでは、皆様、また、次のお話でお会いしましょう。

十六ページ目：執筆配信をした日

「はい、皆さん、セイハローー！ ホツシーでーす」

時間が過ぎるのは早いものでデビューから2週間ほど経つた。すでに慣れたいつもの始まりの挨拶をして今日の配信が始まる。だが、今日の配信は俺にとつて少しばかり不安のあるものだつた。

「今日はですね、短編小説を書きたいと思います」

そう、執筆系Vtuberとして初めて配信で書く執筆配信だつたのだ。もちろん、ニコ生時代から話しながら小説を書くという行為はそれこそ数えきれないほどやつていたので慣れている。

しかし、Vtuberとして活動していくと決めた今、リスナーさんが楽しめるような配信にしたい。前にも書いたが、執筆配信は画面のほとんど動かず、ニコ生で執筆配信を何度も経験していたといつても書いている間は無言になることが多かつた。そんな配信を長時間、見ていられるリスナーさんは常連で俺の配信に慣れている人以外にはいないだろう。

「なお、今回は即興短編小説を書いて朗読する配信です！」

そこで考えたのは『即興』と『朗読』。『即興』で書くことでパフォーマンス感を出しつつ、『朗読』することで書いた成果をきちんとリスナーさんに聞いてもらう。更に書くジャンルを短編にすればダラダラと小説を書き続ける様子を垂れ流す心配もない。言つてしまえば、執筆→朗読といったように区切りを用意したのである。

「更にですね、即興短編小説を書くにあたつてとあるサイトを使用したいと思います」

そう言いながら画面に今回使用するサイトを表示する。

このサイトはランダムで『お題』と『必須要素』を選出し、制限時間も図ってくれる、この配信にうつてつけのサイトだつた。むしろ、このサイトを見つけたからこそこの配信を思いついたと言つていいだろう。

「二次創作バージョンもあるようですが、今回はオリジナルでやりたいと思います。そして、このサイト、Twitterと連動します」

このサイトを使用して書き始めた時と完成した時にTwitterと連動していれば自動的にツイートしてくれる機能もあってTwitterを見た人にもアピールできる。宣伝力もバツチリだ。

「書いてはいないんですが、試しにやつて見た時はお題が『猫の娘』。必須要素は『豚肉』だつたと思います」

お題は制限時間と時間帯によつて変わるらしく、例えば制限時間が1時間の場合、2

1時～22時までは同じお題が出るようだ。必須要素は完全にランダムである。

「まあ、簡単に言つてしまえば『ランダムでお題を出すので制限時間内に小説を書こう！』というサイトですね」

なお、制限時間を過ぎるとそれ以上、入力ができなくなる上、後から加筆も不可能。つまり、未完成の小説は未完成のまま、投稿されてしまうのだ。後から小説を削除できるとはいえ、これでも9年以上、小説を書き続けている身だ。それは極力避けたいところである。

「制限時間は1時間。必須要素もありでやりたいと思います」

自分の書くスピードを考えると制限時間が15分、30分では書き切れる自信はなく、2時間以上だと配信を見ているリスナーさんが飽きてしまう可能性が高い。1時間も決して短くはないが妥当だろう。

「じゃあ、そろそろやつていきましょうか」

そう言いながら軽く深呼吸する。書き慣れているとはいっても、即興で短編小説を書いたことがない。いきなりお題を出されてパッと話の内容を思いつくことができるのか。内容は決まっていても制限時間内に書き切れるのか。

「ちよつと、本気出すよ、ホツシー。これでも執筆系Vtuberですからね」

そんな不安を蹴飛ばすようにそう言い切った。不安要素は山ほどあるが、やってみな

いことにはわからない。

まずは挑戦する。V t u b e r になつて改めて気づいたチャレンジ精神の大切さ。それをここで発揮せずしていつ発揮するのだ。

「それじゃ、いきますよ。よーい、ドン！」

その合図と共に挑戦するというボタンをクリックすると画面が切り替わり、上にお題と必須要素、残り時間が表示された。

「まずはお題ですね。『反逆のクレジットカード』。必須要素は『手帳』……なるほど？」

あ、うん、終わつたかもしれない。

「うん、行けそうですね」

『反逆のクレジットカード』というお題のインパクトに最初は動搖してしまつたが、1分ほどで話の大まかな流れを思い付き、さくさくと書き進める。もちろん、途中、リス

ナーサンのコメントに反応しているが、コメントが止まればひたすら無言。さすがに自分から話題を探しながら小説を書くことはできないのでコメント待ちになつてしまふのは許して欲しい。

「うーん、誤字脱字はいいかな。完成です」

思いのほか、スマーズに書き終えてしまい、制限時間15分ほど残して完成のボタンを押す。すると、タイトル入力画面に移行したので配信画面から消してちょっと悩みながら決める。

「はい、完成しました。早速、朗読しましようか」

タイトルも決まり、ツイートされたのも確認し、すぐに朗読することになった。

「では、いきます。タイトルは——『反逆者』」

「……はい、以上でござります！」

朗読を終え、ホッと安堵の溜息を吐く。多少、荒いところはあるが初めてにしてはいいのではないだろうか。やろうと思えばできるものだな。サイトのタイトルに戻りながらそんなことを思つた。

——ギャグ漫画wwwじゃないですかwww
——ちゃんとお題通りで草

「だつて、お題が『反逆のクレジットカード』だぞ！　そりや、ギャグになるに決まつてるでしよう！」

コメントに対して全力で叫ぶ。これでドシリアルな短編小説を、それも即興で書けたら尊敬に値する。正直、自分にはできる気がしない。

「それじゃ、次に行きましょうか。よーい、ドン！」

初回を無事に成功させた勢いのまま、次の課題に挑戦。次はもつと簡単なお題が来ればいいなと思いながら挑戦するボタンをクリックした。

「お題は『彼とサイト』。必須要素は……『自殺エンド』!?」

うん、やはり、この小説は無茶振りが酷すぎる。

この後、俺はなんとか小説を完成させ（最後、ギリギリのところで書き切れなかつたがそこをあえて伏線にすることで完成させた）、朗読して配信を終えた。

だが、大変だつたのは確かだが、それ以上に楽しかつた。やはり、俺は小説を書くのが好きなんだと実感できた配信だつた。だからこそ、これを機に『即興短編執筆配信』をすることになつたのは当たり前の話かもしれない。

この小説を書いている今は忙しくて最近できないがまた定期的にやりたいと思つてゐる。

さて、次回のお話だが、今のところ、予定は考えていない。もしかしたらかなり時間が飛ぶかもしれないけれど当時と現在とでは色々と変わってしまったので許して欲しい。

それでは、皆様、また、次のお話でお会いしましょう。